
双子の妹は純粋種!?

フィロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の妹は純粹種！？

【Nコード】

N4716T

【作者名】

フィロ

【あらすじ】

初めまして織斑十夏です。織斑一夏は双子の兄になります！！！！OOとISのクロス書いてみました。気に入っていただけると嬉しいです。

第1話「初めまして」

「初めまして。私の名前は織斑十夏。おりむらとうか今年で十五の元気な恋する乙女です！！！！」

元気に挨拶。これは基本中の基本。ちゃんと練習もしたし、ミスもしていない、完璧。そう思ってたクラスを見回すも、そこまで反応してくれない。何故だろう？やはりもう一押し必要だろうか。

「ええっと、家族構成は双子の兄が一人と少し歳の離れた姉が一人です。あ、二人ともこの学園にいます」

そういうと、クラスの視線が集まる。うう、なんか客寄せパンダみたいに扱ったお兄ちゃんとお姉ちゃんに罪悪感が。

ええっと、まずは現状報告！！私がいるのはIS学園という場所です。え？ISって何？ええっとISというのはですね。簡単に言えば『世界最強の兵器。ただし女性にしか扱えない』というピーキー極まりない物です。まあ、お兄ちゃんという例外がありますけど。このISを製作したのはお姉ちゃんの知り合い、というより悪友の篠ノ之 束さんです。実は公式に発表されてはいませんが、ISの製作には束さんだけでなくもう一人。関わっている人がいるんですが本人曰く『僕が関わると色々、面倒なことになる』といって自分のことを隠しています。まあ、本人が良いと言うなら私は全然構いません。その方がライバルも少なくなりますし。

「質問」

「はい、何でしょう？」

「織斑さんの家族ってやっぱり、千冬先生と一組の一夏君？」

「はい、そうです」

そう答えると、クラスの皆が騒ぐ。うん、やっぱり二人は有名だな。

「更に質問。さっき恋する乙女って言うってたけど。そこを詳しく」

好奇心旺盛な女性徒が聞いてくる。むむ、やはり聞いてくるか。ではお答えしましょう。

「私が恋している人はティエリア・アーデさんです」

私の声がクラス『一年三組』に響く。さあ、今日から楽しい学園生活の始まりだ。大丈夫。どんな困難があってもティエリアさんから貰ったIS『ヴァーチェ』と私の『イノベーター』（ティエリアさんが言ってたけど私にはさっぱり）としての能力があれば問題なし。

「織斑さん一ついい？」

「はい？」

その声に視線を向けると、綺麗な茶髪を三つ編みにして腰まで伸ばし、顔にそばかすがある女子が立っている。なんというか、凄く勝気な人だ。

「貴女。ISの経験は？」

「えっと、試験のときだけかな？」

私の言葉を聞いてその人はニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「そう、かの『ブリュンヒルデ』を姉に持っていると期待したんだけど。期待外れみたいね」

その言葉にムツとする。

「それって酷くない？というよりその私のほうが貴女より優秀です。っていうのは早計じゃないの？」

私の言葉を目の前の女性徒が鼻で笑う。

「そうかな？ISでもどんな物でも要は経験が物を言うのよ？確かに私は各国の代表候補生やここにいる先生方よりもISの経験は低いわ。けど、貴女より上なのは確か。なんなら試してみる？」

その挑発的な言葉に私は我慢できなくなる。

「じゃあ、試そうよ？言つとくけれど私、強いからね？」

挑発には挑発。相手のほうも少しムツとしたのか。

「その言葉。忘れないでね？それと唯の勝負じゃつまらないから。勝ったほうがクラスの代表ってことにしましょうか。先生もそれでいいですね？」

女性徒の言葉に先生がため息を吐きながら了承する。その後、試合は一週間後に決まった。奇しくもその試合はお兄ちゃんのクラス

代表を決める戦いの日と同じだった。

第1話「初めまして」（後書き）

何を書いているんだ私はorz

どうも、今回の新作は些かブームに遅れた『IS』です。主人公は一夏の双子の妹、十夏です。性別、キャラ共に今までの主人公からかなり離れたキャラですが、実際に書いてみると中々楽しい。他のに作品ともども頑張って執筆していきたいので応援お願いします。

第2話「現状報告」

「というわけです」

『いきなり実戦とは。まあ、君らしいといえば君らしいが』

場所は寮の自室。二人部屋だがもう一人はまだ部屋に帰ってない。暇なのでティエリアさんに現状報告をしているのだ。

『まあ、早くヴァーチェに慣れるに越したことはない。それにヴァーチェの性能と君が持つイノベイダーとしての能力を発揮すれば、問題はないだろう』

「ティエリアさん。そのイノベイダー、詳しく教えてくれませんか？私を知っているのはこの目だけです」

そういつて、意識を集中する。すると、私の目が金色に輝く。

『そうだな。そろそろ君にも話していい頃合だろう。君とタバネ、チフユに話したが、僕は遠い未来の人間なのは知っているね？』

「うん」

頷く。そう、ティエリアさんは未来の人間なのだ。それを知ったのは十年前。家の近くにある公園で倒れていたティエリアさんを保護した後、その場にいた私とお姉ちゃん、東さんにティエリアさんが伝えたのだ（お兄ちゃんは篝さんと道場にいたので知らない）。

『僕たちのいた時代から三世紀ほど前に一人の天才科学者、イオリ

ア・シュヘンベルグが提唱した進化した人類。それがイノベーターだ。イノベーターは状況把握能力、空間認識能力、脳量子波、俗に言えばテレパシーによる意識の共有などの能力がある。他にも細胞の変化による肉体の強化、人間の倍の寿命など、様々な恩恵を得ている。本来、イノベーターは高純度のGN粒子を浴び続けることで、通常の人間が変革し発生する』

「GN粒子ってあの緑色の粒子だよな？束さんと一緒に研究していた」

『ああ、君がイノベーターに覚醒したのは僕たちの研究を最も近くで見ていた事も原因の一つとして考えられるが、それだけでは説明がつかない』

「だよね。その理屈で言うと、私よりも束さんの方が覚醒しやすいもんね」

そういつて、笑う。

『だが、現実として君だけがイノベーターとして覚醒した。物事にはイレギュラーは付き物だが。君の場合、恐らく元々の素質があったのだろ。それも刹那をも超えるほどの』

「刹那さんってティエリアさんの仲間で私と同じイノベーターの？」

刹那、という人物は私がイノベーターとして覚醒した時に聞かされた人物だ。

『そうだ。けれど、君と刹那ではかなり立場が違う。君と彼では浴びた粒子の量や純度も異なる。けれど、君は刹那より純度が低く且

つ量が少ない粒子で覚醒した』

「それだけ、私の存在が異常なんですよね？」

言いながら、自分の発言に凹む。これでは化け物の様だ。それを察したのかティエリアさんが咳払いする。

『そう悲観することでもない。逆に誇っていいんだ。君は人類から進化した存在なんだと』

「それは……そうですね」

『君の言いたいことも分かる。けど、事実は事実だ。それを受け入れるか、拒絶するか。それは君次第だ』

それを聞いて、私はため息を吐く。

「そうですね。此処でウダウダ考えたって私がイノベーターである事実は変わらない。だったらイノベーターとして『来るべき対話』に備えなきゃ！！！！」

そういつて、立ち上がる。が、足を滑らしてベッドから落ちる。

「あう」

『フフ、そういうポジティブな所が君の魅力だな。だが『来るべき対話』は人類の意思が統一し、尚且つ外宇宙に旅立てるほどの技術力が無ければ実現できない。まだイノベーターの出番は無いよ。君は学園生活に専念しなさい』

「はあゝい」

痛む頭を摩りながら返事をする。

『ではそろそろ切るよ。こちらも用事があるのでね』

「はい、ティエリアさんも頑張ってください」

そういつて、電話を切る。そうして携帯を机に置くとベッドに寝転がる。

「久しぶりにティエリアさんと電話しちゃった」

そういつて、枕を抱きしめ、ベッドの上を転がる。

「相変わらず、綺麗な声だな。それにしても、今何処にいるんだろ？この前はイギリスにいたからまだいるのかな？それとも、他の国？」

彼は色んな国を飛び回っている。理由は謎だが。理由も無く動く人ではないのは確かだ。

「君は学園生活に専念しなさい、かあ」

そういつて、両足を上げ、反動を付けると、立ち上がる。

「そういえば、お兄ちゃんに会ってないっけ」

最後に会ったのは三日ほど前、何処にいるかは事前に聞き込みで分かっている。

「男はお兄ちゃんだけだからね」

部屋を特定するのは難しくなかった。早速、会いに行こうとドアを開ける。どうやらまだ同居人は来ていない。

「ううん、同じ部屋の人も合鍵はある筈だから、鍵は閉めて大丈夫だよ」

言いながら、鍵を閉め、歩き出す。

通路を歩いていると、部屋の前で項垂れているお兄ちゃんを発見。なにやら元気が無さそうだ。取り敢えず、元氣付けよう。そう思い、お兄ちゃんに氣付かれないよう注意しながら走る。そしてお兄ちゃんが氣付く寸前、勢いよく跳躍する。

「ん？」

「イノベーターキイイイイック!!!!!!!!!!」

「じほっつ?!」

跳び蹴りが上手い具合にお兄ちゃんの腹部に深くめり込む。

「もう、そんな暗い雰囲気じゃ彼女の一人も出来ないよ？まあ、お兄ちゃんほど朴念仁じゃ出来るかどうかも怪しいけど。あれ？お兄ちゃん？」

笑顔で言うも、お兄ちゃんからリアクションなし。不思議に思っ
て見ると、ピクピクと痙攣しているお兄ちゃん。

「うん、御免。まさか、それほど威力あつたなんて」

恐るべし、イノベーターの身体能力。

「……………相変わらず、いきなりだな。十夏」

「相変わらず、リターン早いよね。お兄ちゃんは」

そういつて、立ち上がるお兄ちゃんに手を貸す。すると、ドアが
開き。見覚えのある人物が出てきた。

「あ、箒さんだ。久しぶり〜」

「十夏か。久しぶりだな」

その後、立ち話しもなんだから、とお兄ちゃんが部屋に私を招き
入れた。私としては嬉しいのだが、もう少し箒さんの事を考えたほ
うがいいよ？

「ええっ?! イギリスの代表候補生と試合するの!？」

「お、おう」

私の大声にお兄ちゃんが頷く。私は大きくため息を吐く。

「バカだ、バカだと思っていたけどまさか実力の違いも分からずに喧嘩売るなんて」

「それならお前だって同じだろ？」

お兄ちゃんが不満げな顔で反論する。

「あのねえ、私が戦う相手は普通のIS操縦者。お兄ちゃんが相手をするのは国を代表するIS操縦者。実力からして全然違うの」

「国籍が違っただけじゃないのか？」

その言葉に私と篤さんがため息を吐く。

「篤さん。お兄ちゃんに分かりやすく。且つ、理解しやすいように説明お願いします」

私の言葉に篤さんが頷く。

「そうだな。剣道で言うなら十夏の相手は精々、三年も稽古をサボったお前。逆に一夏の相手は私くらいの実力だと言えば、納得するか？」

「ああ、うん。納得した」

そういつて、頂垂れるお兄ちゃん。

「篤さん。お兄ちゃんが中学の時、剣道やってないの、知ってたの？」

「本人から聞いた。まあ、それは私が何とかするでしょう。問題は十夏の方だが」

「それは大丈夫。私も私でちゃんと考えてあるから」

そういつて、笑う。

「本当に大丈夫か？」

「心配性だな、お兄ちゃんは。もう少し私を信じてくれてもいいんじゃない？」

そういつて、椅子から立ち上がる。

「それじゃ、そろそろ部屋に戻るね」

そういつて、部屋を出る。っと、そうだ。忘れるところだった。

「お兄ちゃん。私がいなかったら篤さんにエッチな事しちゃ駄目だよ？」

「なっ?!」

「流石に俺もそこまで命知らずじゃねえよ」

「一夏、それはどういう意味だ？」

なにやら不穏な空気を醸し出しているけど、別にいいか。私は自分の部屋へと戻るのであつた。

「ふむ、いきなり実戦とは。まあ、彼女なら問題は無いか」

そういつて、椅子に背を預ける。携帯を置いてある机には通常より大きめのPCが自動で作業をしている。窓から見える外は雨が降っている。

「ん？」

ふと、携帯の隣にあるコーヒークップの中身がない事に気付く。

「買い置きはまだあつた筈だが」

そういつて、キッチンの戸棚を開ける。案の定、新品のコーヒーがあり、一人分作る。そして椅子に座りなおし、一口飲む。その時、携帯が鳴る。手に取ると非通知だつた。

「？」

取り敢えず、通話ボタンを押す。

『はあゝい。もしもし？皆のアイドル、篠ノ乃 束さんだよ』

幸せ全開。元氣一杯の声に呆れる。

「今日はどうした？それより。いい加減、非通知で掛けてくるのは止してくれ」

『わお、ティエリは平常運転で束さんも安心だね。そんなティエリに束さんからご依頼だよ。嬉しい？』

「嬉しくありませんね。それでも僕は現在進行形で忙しい。三ヶ月ほど後になってくれると助かるのですが？」

『残念。後、一週間以内に届けないと間に合わないんだよね』

一週間以内？

「その届け物はもしや？」

『お？興味出てきた？やっぱり？だよね』

「正直に答える。それは『僕と君が』共同で開発した」

『そうだよ。ティエリが技術提供してくれた例の粒子をISに動力源として加えた試作品がジユウちゃんに渡したヴァーチェだよね？これはそのデータを基にティエリと私で作った最新版！！！』

！持つて行く場所は勿論！！！！』

「IS学園か。だが、そんな所に無名の僕が入れるとは思えないが？」

IS学園の警備は厳重。それを未確認のISを持つて入るのは無謀だ。

『はっはっは。この束さんの辞書に不可能なんて文字はないんだよ！！！！まあ、辞書なんて持つてないけど。取り敢えず、この束さんを信用してね。』

そう言われ、確かにこの女性に掛ければ僕一人位、簡単に学園に入らせることなど造作も無い。

「いいだろう。僕もIS学園には少なからず用がある。だが、一つ答えろ」

『何かな？』

「何故こうも、僕を信用する？あの時も言った通り、僕はこの時代の人間じゃない。いや、そもそも僕は嘘を付いているかもしれない。何故、君は僕を信用する？」

『信用なんてしてないよ』

即答だった。そして彼女は楽しそうに続ける。

『私がティエリに協力してるのは楽しそうだったから。ティエリが教えてくれた未来の歴史も兵器も。そして一緒にいて、今借り

ているハ口の中にあつたGN粒子も束さんの興味を惹くには十分だもん。それにまだティエリは私に隠し事してるでしょ？」

「当然だ。全ての情報を開示するメリットなど僕に無い」

『でしょ？そこがミソなんだよね。因みに束さんはラーメンなら醤油が好みなんだけどね。つまりまだ開示されてない秘密を考える楽しみが出来るわけ、これって中々楽しいよね？答えがどれだけティエリの真実に近いか。それを考えるだけでも束さんの暇つぶしには丁度いいんだよ。納得した？』

まったく、この女性は言うに事欠いて暇つぶしとは。僕はため息を吐いて。

「一応は納得しました。依頼は受けよう。それと」

『何かな？』

「チフユには言われていると思うが。くれぐれも『やりすぎ』ないように」

『りようかい』

そういつて、電話が切れる。机に携帯を置き、深く息を吐く。

「全く厄介極まりない女性だ」

正直、苦手だ。昔も今も。そして顎に手を当て考える。

「やはり此処は僕が知っている地球の歴史ではないか」

そもそも、ISというのもその開発者である彼女も僕がいた歴史には存在しない。つまりこの世界は平行世界と考えたほうがいいだろう。

「それにしてもやはり彼女は凄い」

文句なし、世辞抜きでイオリアよりも天才として上だろう。だが、彼が持っている思想を彼女が理解することは無いだろう。

「何故なら、彼女は自分の興味のみに傾く人間なのだから」

彼女は興味がある人間以外はそれこそ、道端の石程度の認識しか無い。それがどうしてイオリアが掲げた思想に賛同しようか？

「まあ、僕は僕の出来ることをしよう」

コーヒーを飲み干し、立ち上がる。そういえば、あのISは誰に使わせるのだろうか。

「確か、名前は『白式・七剣』だったな」

呟いた途端、外で何か重い物が落下した様な轟音が響いた。それに僕はため息を吐きながら外に向かう。

第2話「現状報告」（後書き）

更新！！お待たせしました！！今回はティエリア顔出し。劇場版ラストで出てきたイオリアと似たような生活をしています。そして白式ですが、若干変更しています。やっぱOOとのクロスなら主人公のISもそっちの方がいいかな、と思ひまして。では次回更新をお楽しみに。

第3話「初陣」

「ん〜！！！！気持ちのいい朝だね〜」

そういつて、私はベッドから降りる。

「試合を前にしている人間とは思えない状態ね」

呆れた様に言ったのは私の同居人で同じクラスの柿崎速華^{すみ}。女性では大柄な体躯で性格も大らか、更に胸も大きい。何だろうか、体が大きければ全体的に大きいのだろうか？そしてステーキとパインサラダが好物のルームメイトだ。

「絶対に追い抜いてやる！！！！」

「いきなり、私の話題に入ったね」

そういつて苦笑する速華。その後、食堂で朝食を取り、授業を受ける。

「いいか」

先生であるお姉ちゃんの言葉を聞き流しながら、窓の外を見る。天気は快晴。雲ひとつ無い晴れだった。

「？」

ふと、視線に気付く。それとなく見ると、今日戦う一条光^{ひかり}が私を見ていた。それを見た後、もう一度窓を見る。

「緊張……………ねえ」

小さく呟く。正直、試合自体に不安は無い。あるとすれば果たして自分にヴァーチエを使いこなせるかどうか。幾らティエリアさんにイノベーターだ、人類の革新だと言われた所で実感が無い。もしも、自分にヴァーチエが使いこなせず、無様に負ければティエリアさんだけではないお兄ちゃんやお姉ちゃんの顔に泥を塗ってしまう。それだけは絶対にしたくない。ならば、勝つだけだ。

「よし、頑張るぞ!!!」

「気合を入れるのはいいが。その前に授業を聞け」

お姉ちゃんの声が聞こえたと思ったらゴン、と拳骨で殴られた。物凄く痛いです。

「全く、彼女の用意周到さは驚きだな」

そういつて、僕は自身の服装を確認する。仕立てのいいスーツだ。そして胸には顔写真付きの名札。そこには『倉持技研』の名前。

「成る程『白式・七剣』は表向き『倉持技研』で作っているという事になっているのか。そして僕が『白式』を作った部署の最高責任者

という立場か」

最も『白式・七剣』も僕も『倉持技研』とは一切関係ない。全てタバネが偽造した情報だ。

「まあ、お陰で僕も堂々と学園に入れるのは幸いか」

そういつて、作業している人間に指示を出し。試合が始まる場所に向かう。

「どうやら今日は二試合あるのか。一つはトオ力の試合としてもう一つは」

そういつて、考えていると入り口から誰かがやってきた。

「あ、あの……!」『倉持技研』の人ですか？」

なにやらかなり慌てている。容姿は美人だが、どちらかというところ可愛い、という感じのメガネを掛けた女性だ。僕は頷き。

「はい。『白式・七剣』を持ってきました。それで、何処に運べば宜しいでしょうか？」

「あ、えつと。こちらです……!」

彼女に案内され、作業員と共に向かう。そして向かった先で少し驚くも、そこにいた面々が懐かしく思う。

「久しぶりだな。最も、僕をちゃんと覚えているのはチフユとトオ力か」

「テ、ティエリアさん!？」

いきなり現れたティエリアさんに驚く。ティエリアさんは私を見ると。

「トオカ。そろそろ試合なのだろう? 準備しないでいいのか?」

「え? は、はい! ! !」

言われ、準備する。といっても、ISの起動だけなのだが。

「ヴァーチエ……………」

呟く。すると、髪留めが光り、若草色の光が私を包む。

「おお……………」

十夏の体を若草色の光が包み、それが消えると十夏の姿が変わっていた。白を基調としてゴツゴツとした分厚そうな装甲。背中には若草色の粒子を出すコーンがある。両肩には砲塔が二つあるキャノン砲。そして右手に大きなバズーカを持っている。既存のISとは違い、体全体を覆う全身装甲フルスキンと呼ばれる物だ。

『ううゝん』

十夏が不満げに唸る。

「どうしたんだ？」

『やっぱり太って見える』

そういつて、肩を落とす十夏。それにため息を吐くティエリア。

「我俣を言うな。ヴァーチェは重装甲と高火力の砲撃戦型のISだ。まったく何故、そんなピーキーなISにしたんだ。他にも候補があっただろうに」

『いやあゝ、なんか運命的なモノを感じちゃって』

そういつて、左手で後頭部を搔く十夏。IS越しだとシニールなだけだ。

「準備が出来たなら、さっさとアリーナに入れ、相手が待ちくたびれているぞ？」

『了解です』

そういつて、十夏はアリーナの方に向きを変える。

『それでは！！！！織斑十夏。ガンダムヴァーチェ！！！！行きます！！！！！！』

叫びと共にヴァーチェが飛び出し、十夏がアリーナに向かう。俺たちは直ぐに空中に浮かぶディスプレイを見る。そこにはヴァーチェを纏った十夏とリヴァイブを纏っている生徒が対峙していた。

「それが貴女のIS？」

『うん。ヴァーチェって言うんだ。えっと、一条さんのリヴァイブは少し違うね』

一番に目を引くのは両足、両肩、そして背中に付いてあるスラスターだ。

「ええ、私のリヴァイブは高速戦闘用にチューンしたISなの。貴女は見た所、装甲を重点的に強化して機動力を削いでいるみたいね？」

『うん、そうだよ。まあ、それだけじゃないんだけどね』

そういつて、右手に持っているGNバズーカを向ける。

『それじゃ、そろそろ始める?』

「そうね。始めようか」

その言葉と共に試合開始の合図がアリーナに響く。

「それ!!!!!」

開始の合図と共に一条さんがミサイルを飛ばす。

『そこおっ!!!!!』

言葉と共にミサイルの一角にGNバズーカを放つ。ピンク色のビームが狙い変わらず、ミサイルを撃ち落とし、小さな空間を空ける。そこを通り抜け、ミサイルをやり過ごす。

「甘いわね!!」

その言葉と共にアラームが鳴る。その方向を見るとやり過ごしたミサイルが不規則な軌道を描きながら向かってくる。

『嘘!?!誘導性なの!?!』

というか、考えてみればミサイルは誘導するものだ。こんなんじや、お兄ちゃんを馬鹿に出来ない。そう思いながら動く。そして速度を維持しながら後ろを向き、ミサイルを撃ち落とす。そういえば彼女は何処だ?そんな事を考えた瞬間、悪寒がした。

『上!?!?』

言葉と共にヴァーチェの肩に装備されたGNキャノンで真上を攻撃する。そこには驚いた顔をしている一条さん。

「意外と勘がいいみたいね。でも！！！」

そういつて、ISを肩のスラスターを使って回転させ、ビームを避ける。

「まだまだあつ！！！」

同時にミサイルが多数、放たれる。

「おまけえっ！！！！！」

更にミサイルの合間を縫うように銃弾が迫る。

『そんな物！！！！！！』

私はヴァーチェの背部と両脚部に備え付けられている装置を起動する。瞬間、その場所から大量の粒子が飛び出し、ヴァーチェを取り囲む。

「十夏！！！！！！」

ディスプレイでは相手のミサイルの爆発に飲み込まれるヴァーチエが写っていた。まさか、やられたのか？

「ふん、性能に救われたな」

後ろで千冬姉が呟く。すると、ディスプレイに変化があった。

「なっ！？」

隣の筈が驚いている。勿論、俺もだ。煙が晴れ、そこに無傷のヴァーチエがいた。しかも、その無傷の理由が。

「バリア………かよ」

呆れてしまう。ヴァーチエの周りには若草色の膜が囲んでいる。そんな物を持っていたなんて。

「GNフィールド」

壁に背を預けていたティエリアさんがディスプレイを見ながら喋る。

「背部と両脚部に設置されている大型のGNフィールド発生器により、GN粒子を自らの周りに固定させ攻撃を無効化する。ヴァーチエの特徴だ。しかも既存のISが装備している武装ではフィールドを抜けることはまず不可能」

「正に鉄壁の守りか。だが、それほどの防御力ならエネルギー消費も馬鹿にならないだろうに」

千冬姉の言葉と共にヴァーチエの周りにあったフィールドが消える。そしてヴァーチエの反撃が始まった。

「チイツー!!」

一条さんが舌打ちをしながらビームを避ける。そして避けながらこつちに攻撃を仕掛けてくるが、それを避ける。流石にさつきは仕方なかったけど、あんまりフィールドを使ってエネルギー切れは笑えない。

『流石に高機動型。当たってくれないか』

そう、こちらの攻撃を危なげながら一条さんは避けている。まるで背中に目があるのか、と錯覚してしまうくらい。彼女は私の攻撃を避ける。

『そこ!!--!』

後ろを取り、GNバズーカを撃つ。そして撃った瞬間、彼女が笑みを浮かべていた。

「くうっ!!--!!--!」

突然、スラスターを前に移動させ、急制動を掛ける。そしてビームが当たる瞬間、上空に飛び上がった。

『噓！？』

慌てて、私もブレーキを掛けるけど、遅かった。顔だけ振り向き、私が見たのは逆さになった体勢でマシンガンを構え、笑みを浮かべている一条さんだった。

「遠慮はいらないわ。全弾受け取りなさい！！！！！！」

叫びと共にリヴァイブの全兵装が私に向かって殺到した。

背後を取られたヴァーチェがリヴァイブの一斉射撃を受け、爆炎に飲み込まれる。

「十夏……………」

流石に千冬姉も十夏の名前を呼ぶ、その頬を汗が伝う。瞬間、煙の中から先程よりも太いビームが飛び出し、相手に命中した。

「なっ！？」

絶句する筈を横目で見ながら俺はディスプレイを見る。

『勝者 織斑十夏』

アナウンスの声と共に煙が晴れ、そこには両肩の装備が外れたヴァーチエが浮かんでいた。

「成る程。攻撃が来る直前、GNキャノンを外し、盾に使ったのか。そして爆発を利用して距離を置き、砲撃。考えたな」

ティエリアさんの解説が終わると共にヴァーチエが戻ってきた。

危なかった。あの時、咄嗟にGNキャノンをパージしなかったらやられていたかもしれない。

「やったな、十夏」

お兄ちゃんが笑いながら近づく。

「うっん、ギリギリだよ。それに今回はヴァーチエの性能に助けられたから勝てただけ。私自身の力なんて大したこと無いよ」

そういつて、苦笑する。すると、誰かが私の頭に手を乗せる。見るとお姉ちゃんが微笑んでいた。

「確かに今回はISの性能に頼って得た勝利だが。お前が勝ち取った勝利には違いない。それと謙遜と卑屈は違う。お前はもう少し胸を張ってもいいんだぞ?」

そう言われ、嬉しくなる。ふと、ティエリアさんの方を見ると、ティエリアさんは優しく笑っていた。

「次はお兄ちゃんだよな」

「ああ、俺も勝ってやるぜ」

そういつて、ティエリアさんが持ってきたISに向かう。

ISを身に纏う。なんというか、物凄くしつくり来る。

「どうだ?何か不具合があるなら、言ってくれ」

「いえ、全然。むしろ、丁度いいです」

そういつと、ティエリアさんが頷く。

「このISだが基本的な所は既存の物とそう変わらない。違いがあるとすれば、動力炉周りがヴァーチェと同規格位だ」

「え？じゃあ、俺にもあのフィールドを使えるんですか？」

俺が聞くと、ティエリアさんが顎に手を当てる。

「可能だが。かなりエネルギー消費が激しい。そうそう頻繁には使えない。使えるとしても十秒持つかどうかだ。だが、その代償に防御力は折り紙つきだ」

成る程。使えるには使えるが、過信はしない方がいいみたいだな。次に俺の目の前にディスプレイが浮かび上がる。そこには『白式・七剣』の画像があった。

「次に簡単な説明だ。この『白式・七剣』はその名の通り、武装が七つの剣だけに限定された近接特化の機体だ」

「射撃武器は無いんですか？」

十夏が聞く。確かに俺も射撃武器は欲しいと思うが。

「残念だが、特殊な訓練をしていない彼に射撃武器を持たせるメリットが無い。トオカのヴァーチェはこの所をサポートしてくれるOSがあるから問題ないが。彼の場合、それ自体を捨て、余った容量を七つの剣にしたんだ」

そんなに凄いのか、この剣。

「次に武装の説明だ。七剣の種類だが、まず腰にある長短二本の実体剣『GNロング・ショートブレイド』これは手に持って、使うことも勿論だが。腰の武装ラッチに固定された状態で刀身を前方に回転させることも出来る。これにより、不意に近づいてきた敵に対し

て奇襲も出来る」

言葉と共にディスプレイに表示された『白式・七剣』の腰部が点滅する。

「次にGNビームサーベルとGNビームダガー。ビームサーベルは近接用。ダガーは投擲用として使える。エネルギーを調整してダガーとサーベルを分ける事が出来る。デフォルトの設定では両肩後部に装備された二基がサーベル。腰背部に装備された二基がダガーとなっている」

ティエリアさんの指摘した場所がそれぞれ点滅する。

「そして最期の七本目。GNソード『雪片式型』そしてこの剣だけでなく全ての剣にある能力が備わっている」

「ある能力？それって何ですか？」

俺の言葉にティエリアさんが薄く笑う。

「それは君自身が確かめたまえ」

教えてくれたってバチは当たらないんだけどな。

「その機体のデメリットだが、エネルギー消費が激しいこと。性能に過信して突っ込むと直ぐにエネルギーが切れるので無理をしないことだな」

言われ、絶句する。幾らなんでもそれは酷すぎないだろうか。

「おっと、僕に文句を言うのは筋違いだ。確かに表向き、僕が『白式・七剣』開発の最高責任者と言われているが、実質僕が協力したのは動力炉であるGNドライブ、そして武装の技術提供だけだ。武装システムを発案したわけではない」

そういつて、説明は終わりだ、と言わんばかりにディスプレイを閉じる。

「まあ、君なら使いこなせるだろう。何せ、彼女の弟なのだからな」
そういつて『白式・七剣』の装甲を叩く。俺はため息を吐く。

「一夏」

「なんだ、箒？」

今まで黙ってた箒が近づいてきた。

「絶対に勝て」

短く箒が言う。俺は笑って頷く。

「ああ、任せな！！」

そういつて、俺は『白式・七剣』を操り、アリーナに向かった。

第3話「初陣」（後書き）

どうも、今回は十夏の戦闘だけです。そしてヴァーチェは思うところがあり、フルスキンです。そしてオリキヤラですが、さて元ネタ分かる人いるかな？意外と有名ですけど結構昔ですしね。さて今回『白式・七剣』の能力ですが、特に変更点は無いです。零落白夜もちゃんとあります。そんな中で流石に残りの六つの剣もなんか、あった方がいいなと考えてます。まあ、デメリットが零落白夜と同じかそれ以上にしないと駄目なんです。さあ、次回は一夏対セシリアです。少し原作とは違う戦闘にしてみるのでお楽しみに

第4話「射手と剣士」

空中に浮かぶディスプレイにはお兄ちゃんと対戦相手が対峙していた。

「対戦相手のセシリアさんだっけ？あの人のISってどんなタイプ？」

ふと、隣にいる箒さんに聞く。

「確か、ブルー・ティアーズという名前だった筈だ」

いや、名前はこの際、どうでもいいんだけどな。まあ、箒さんも詳しく知らないみたいだし。

「ブルー・ティアーズ。第三世代のISで射撃に特化した機体であり、第三世代兵器。通称『BT兵器』のデータをサンプリングする為に開発された実験・試作機という意味合いが濃い。見た目通り、中々遠距離を得意とした機体だ。火力はヴァーチェに劣る分、機動性が高い。総合的に見るとセシリア有利ということになるな」

ティエリアさんがディスプレイを見ながら説明してくれた。そしてそれを聞いて心配そうにディスプレイを見る箒さん。何か励ましの言葉を掛けるべきなのだが。生憎、そんな言葉は思いつかない。なので私も同じようにディスプレイを見つめる。

「最後のチャンスをお願いしますわ」

「チャンス？ん〜、遠慮しとく」

そういつて、腰のGNブレイドを抜き、具合を確かめる。悪くは無い。けど、二刀流なんて初めてだから上手く使えるか不安だ。ふと、目の前にいる相手が震えていた。

「何処か具合が悪いのか？」

そういつと、相手はキツと俺を睨む。さてはさっきのチャンスを遠慮したのが不味かったのか？そう考えると同時に試合開始の合図が鳴る。

「最後のチャンスを棒に振るった事を後悔なさい。さあ、派手に踊りなさい！！私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円奏曲で！！！」

言葉と共に手に持ったライフルからビームを連発する。

「くっ！！！」

それをバックで移動しながら避ける。そして避けきれない物をGNブレイドで弾く。

「あら、少しは出来るようですわね？ではこれならどうかしら？」

そういうと、ブルー・ティアーズから四基。突起の様な物体が飛び出し、変則的に動きながらビームを撃ってくる。

「チイツ!!!!」

GNブレードを仕舞い、四基のビットから離れる。

「逃がしませんわ!!!」

追ってくるビット。ぶつつけでやってみるか。

「くっく!!!!」

ビームを紙一重で避けながら一気に急制動を掛ける。幾ら、ISで守られているといっても限度があるらしい。それなりに辛い。そしてビツトとの距離が一気に縮んだ瞬間、肩にあるGNサーベルを抜く。

「くうっ!!!!おおっ!!!!」

振り向きながら、加速。ビットの内、二基をすれ違い様に切り捨て、離れているビット二基にエネルギーを抑えたGNダガーを投げ

「なっ！？」

そして俺はそのままの速度を維持しながらブルー・ティアーズに急接近する。すると、驚きの表情をしていた相手が笑う。

「残念。まだありますのよ？」

そういつと、腰に設置されていた二基のビットからミサイルが飛んで来た。

「うおっ!？」

加速している俺にそれを避ける術は勿論無かった。

ディスプレイでは急接近したお兄ちゃんをミサイルで撃墜したセシリアさんが写っていた。

「あら。今のは私でも避けられないな」

「ヴァーチェの特性上、近接戦闘をする事は無いのだがな」

私の言葉を冷静にティエリアさんが返す。ディスプレイを心配そうに見つめている箒さん。

「大丈夫だよ」

そういつて笑う。箒さんが私を見る。

「お兄ちゃんはこの程度でやられたりしないよ」

「……………そうだな」

そういつて、ディスプレイを見る。すると、変化があった。煙が晴れ白い機体が見えたからだ。

「まさか、一次移行！？^{ファーストエイス}貴方、今まで初期設定で戦ってましたの？」

そんな声が聞こえていたが、俺は簡易ディスプレイに表示されたデータを見る。

『システム正常。零落白夜起動』

その文字が表示された瞬間、背中に設置されたGNドライブが唸りを上げGNソードの刀身が展開、エネルギーが噴出し、刃を作る。

「まあ、いいですね。これで終わりです！！！」

そういつと、俺に向かってミサイルを放つ。俺は右手にGNソードを持ち、左手に持ったGNロングブレードでミサイルを切り裂く

「ならこれで！！！」

ライフルを構え、ビームを放つ寸前、俺はGNロングブレードを投げ、ライフルを破壊する。そしてそのまま、突っ込む。

「くっ!？」

接近した俺に回避は無理だと分かったのか、右手に何かを持とうと、粒子を集めるが遅い。俺は振り上げた『雪片式型』を振り下ろす。それはブルー・ティアーズを切り裂く。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

寸前で『白式・七剣』のエネルギーが切れた。

試合が終わり、お兄ちゃんの部屋で反省会することになった。

「まあ、ドンマイだね」

「そうだな。調子に乗ってエネルギー残量を確認していなかったお前が悪い」

「返す言葉ありません」

そいつって、深々とため息を吐くお兄ちゃん。

「まあ、最後の盛り返しは凄かったよ。ね？ 箒さん」

「む？う、うむ。悪くは無かったな」

そういうと、俯いた顔を上げる。

「それにエネルギーが切れたから負けたんだよ？これって裏を返せば、エネルギーが後もう少しだけあれば勝ってたんだよ。代表候補生相手にコレは凄いなと思うんだけど」

「そうだな。考えてみれば、最後はお前が押していたんだ。もっと修練を積みめば、勝てるだろう」

そういうと、お兄ちゃんが顎に手を当てて考える。

「確かにそう、考えるとそうだな。でも、負けは負けだしな」

その言葉に私はため息を吐く。

「過ぎたことは後悔してもいいけど余計に引き摺らない！！！！じゃないと次は本当に負けちゃうよ？今日の失敗を明日の成功に繋げる。でしょ？」

そういつて、笑う。

「……………だな。クヨクヨ悩み過ぎるのは駄目だよな」

そういつて、朗らかに笑う。まあ、あんまり悩まないのも考え物だけ。

「んじゃ、私は部屋に戻るね」

「ああ、悪かったな。約束破って」

「んじゃ、次の約束はちゃんと守ってね？」

私の言葉にお兄ちゃんが頷く。

「そうだ。十夏、お前ならセシリアにどう勝つ？参考がてら聞きたいんだが」

そう、お兄ちゃんが言ったので私も少し考える。

「そうだな。私なら全兵装解放して飽和攻撃かな。私のヴァーチエ、火力は既存のISではダントツで高いし」

まあ、奥の手を使えば問題は無いだろうけど。データ通りなら『通常の三倍』の火力を引き出せるみたいだし。

「んじゃ、お休み」

そういつて、私は部屋を出る。しばらく歩くと私の部屋の前で一条さんと柿崎さんが並んで立っていた。

「お、来た来た」

柿崎さんはそう言って笑う。

「どうしたの？」

「いや、光がさ。織斑に謝りたいんだって」

そういつて、一条さんの背中を軽く叩く。一条さんは少し恥ずかしそうに頬を掻きながら。

「この前は御免ね。言い過ぎた」

「ううん。別に気にしてないから大丈夫だよ」

そういつて、笑う。一条さんも安心したのか笑みを作る。

「そういえば、柿崎さんと一条さん。仲が良さそうだったけど」

そういつと、柿崎さんは笑って。

「ああ、アタシ達幼馴染だからね。そりゃ、仲良いよ」

「私たちの兄が昔からよく一緒に遊んでたから、それ経由で知り合ったの。それで色々あつて今じゃ、親友かな」

そういつて、苦笑する一条さん。苦勞しているんだろうか。

「ん？もしかして織斑も仲間に入る？」

「いいの？」

少し驚きながら聞く。すると、柿崎さんはニカツと笑って。

「いいも何も、考えてみたら私と織斑は友達だよ。それに光とも今日の模擬戦で友達になったし！！！！問題なし」

「？」

よく分からず首を傾げる。それを見て深々とため息を吐く一条さん。

「速華。それ、昔のしかも男限定のノリだから分からないって」

「へ？そうなの？」

平然と聞き返す柿崎さんに一条さんは頭を押さえる。成る程『同じ釜の飯』とか『喧嘩した後は仲良くなる』とかそういう類のモノか。

「まあ、よく分からないけど。えっと友達になりませんか？」

「こんな聞き方は変だろうけど。仕方ない。そんな私の言葉が面白いのか二人は笑って。

「だから、アタシと織斑はもう友達だって。まあ、今後とも宜しく……！」

「そういえば、速華以外の友達は初めてかも。宜しくね」

私は二人と握手をかわす。すると、柿崎さんが思い出したように。

「そうだ。友達になった記念にさ。お互いに名前で呼ばない？ほら、苗字だと間違えるでしょ？」

そう柿崎さんが言う。確かに苗字で呼ぶとお兄ちゃんかお姉ちゃんの間違えてしまう。しかし、まだ知り合って間もないのに名前で呼ぶのは。少し恥ずかしいな。でも、何事も挑戦かな。

「うん、よろしくね。速華さん、光さん」

「出来れば、さん付け無しがいいんだけどな」

「無茶言わない。これも個性だと思いなさい。こちらこそ宜しく十夏」

「宜しく、十夏。よし、今日は友達記念として食堂でステーキだ！
！！」

そういつて、歩き出す速華さん。それを苦笑しながら光さんが続く。

「アンタは単にステーキ食べたいだけでしょ？ほら、十夏も早く来ないと今日の晩御飯がステーキとパインサラダ固定になるよ？」

「あ、うん」

流石にそれだけ固定というのは勘弁したい。そう思いながら二人に急いで追いつく。色々ありましたが、学園生活は意外と楽しくなりそうですよ？ティエリアさん。

第4話「射手と剣士」（後書き）

どうも、フィロです。今回は一夏対セシリア戦と十夏の友達作りです。ご意見、ご感想がありましたら送ってください。励みになりますので。では次回の更新をお楽しみに

第5話「新たな恋敵出現」

「食堂が騒がしいね」

「何でも一組がメインで騒いでるみたいだな」

一組、ということはお兄ちゃんのクラスか。

「ん？君はもしかして織斑十夏君？」

声に振り向くと、カメラを携えた女性徒が立っていた。

「ええ、そうですけど」

「ラッキー ちょっと一緒に来て。あ、その人達もついでに来て」

「アタシ達はどうですかよ」

と言いながらホイホイ付いてくる速華さんは正直どうかと思う。
光さんはため息を吐きながら付いてくる。食堂に入ると案の定、お兄ちゃんが女性徒に囲まれていた。そしてその両隣には箒さんと金髪の美少女が互いに牽制し合っていた。それを見て、何となく察した。

「あれ？十夏じゃないか、どうしたんだ？」

「通りかかったら、先輩に拉致られた」

そういつて、お兄ちゃんの向かいに座る。

「へー、十夏の兄貴って案外、優男だな。兄貴とは大違いだ」

そういつて、笑いながら速華さんが隣に座る。

「そりゃ、速華のお兄さんに比べたら誰でも優男になるわよ。ていうか、学生と軍人を同一視しない」

そういつて、光さんが座る。というか、自然に私の隣に座っている。私はお兄ちゃんを見ながら。

「両手に花。ってこういう事を言うのかな？ん？この場合は花束？」

「何言つてんだ？」

私の言葉に首を傾げながらお兄ちゃんが答える。私は深々とため息を吐く。

「箒さん。大変でしょうが、頑張ってください」

「な、何をだっ?!」

「何って？決まってるじゃないですか。それとも本人がいると恥ずかしいんですか？」

そういつて、悪戯っぽく笑う。箒さんの顔が赤くなる。そして私は金髪の人を見る。

「初めまして。織斑十夏です」

「セシリア・オルコットですわ」

にこやかに挨拶を交わす。そして小声で呟く。

「正直、お兄ちゃんの何処が良いんですか？」

「ぶっ！？な、何を言ってますの？！私は別に一夏さんの事は」

「俺がどうしかした？」

「何でもないよ。というより、女の子の会話に入ろうとしない。
男子は部屋の隅にGOー！」

部屋の隅を指差す。

「いやいや、流石に今日の主役を隅に置くのは不味いつて」

先輩がそういうと、お兄ちゃんに質問を始める。その間、私たちは運ばれてくる料理を楽しむことにした。そして一通り質問が終わると私に向く。

「さて、次は一夏君の妹さんに質問だ」

「私ですか？」

そういつて、私は先輩に向き直る。

「ズバリ！！！！妹から見て兄は？」

「女垂らしです。そろそろ誰かに刺されてもいい頃合なんじゃない

かな」

因みにお兄ちゃんは箒さんとセシリアさんと一緒に離れた場所で食事をしている。そして私の言葉に先輩の表情が固まる。

「あれ？私変な事言いました？」

「いや、結構辛口に言っただな」って。もっと『お兄ちゃんは誰にも渡さない』とか言うかと思ったけど」

ブラコンはお姉ちゃんだけにしてください。

「昔は確にお兄ちゃんっ子でしたけど。中学に入った時に色々ありまして」

お兄ちゃんの部屋を掃除しているとベッドの下にアレな物があったり、何と言うか、中学の時期が物凄く接し辛かった。

「うん、確かに兄さんの部屋は魔窟だよね」

「ホント、ホント。兄貴の部屋に入るのはいいんだけど。もう少し隠すモン隠せってんだ」

私の言葉に光さんと速華さんがしきりに頷く。

「まあ、そこは深く聞かないことにしとく。で、次だけど貴女もクラス代表になっただんだよね？」

「え？ああ、そうでしたね」

「そうでしたねって。まあ、いいや。それで、なにかコメントとか無い？例えば『私が代表だ！！』とか」

何だろっ、その例え。ふむ、コメントね。

「特に無いですね」

「了解、適当に捏造しておくから」

それ、コメント聞く必要ないじゃん。

「んじゃ、クラス代表のツーショット撮るから」

そういつて、私はお兄ちゃんの隣に座る。

「はあ、なんでお兄ちゃんとツーショット撮らなきゃならないの？」

「俺に聞かれてもな」

そういつて、苦笑するお兄ちゃん。面倒だから辞退しようかな。そう、考えていると視界の端にセシリアさんがいた。何処か悔しそうな表情だ。

「先輩、どうせならお兄ちゃんと戦ったセシリアさんと撮らせれば？ほら、一応お兄ちゃんって学園で貴重な男だし、セシリアさんは代表候補だし。兄妹で撮るよりもいいと思うんだけど」

「む？それもそうね。じゃあ、セシリアさん入れて三人で撮りましょ」

そういつて、ニツコリ笑う。笑顔で「逃がさないよ?」と言っているのが分かる。

「チイツ!!!」

誰にも気付かれないように舌打ちする。その後、三人で写真を撮るもちよつとしたアクシデントがあった。まあ、問題は無さそうなので放置。後日、学校の掲示板に写真が貼り出されていた。

「やつちゃった……………」

あの時、軽くイラついていたから、もしかしたらと思っていたのだが、まさか本当にそうになっていたとは。写真に写っている私の瞳が金色に変わっていた。

「あれ?十夏の目、金色になってねえか?」

速華さんが気付く。

「たぶん、ライトの反射じゃないの?」

「へ?あ、うん。そうだよね、絶対そうだよ!!!」

光さんの言葉に全力で賛同する私。同時に授業開始の鐘が鳴った。

「ほら、二人とも次の授業が始まるから行こ?」

「うん。ん?」

ふと、ポケットに入れてある携帯が震えた。見ると、メールが入っていた。

「差出人は？鈴ちゃん？」

そこにはお兄ちゃんのセカンド幼馴染である彼女の名前が表示されていた。何となく内容が理解できる。鈴ちゃんもお兄ちゃんが好きだから。様子が知りたいのだろう。

「後は学園での態度とか？」

そう思いながらメールを開く。やはり内容は最近のお兄ちゃんの様子を聞く感じ。しかもご丁寧な普通のメールの中にそれとお兄ちゃんの様子を尋ねる感じだ。それに苦笑しながらメールを見ていると。

「へ？嘘？」

そこには自分も代表候補生としてIS学園に転入する。という内容だった。

「うわ、マジ？」

「何がマジか分らんが。お前が授業に遅刻しているのはマジだ」

その言葉と共にスパンという音と共に出席簿が叩きつけられる。

第5話「新たな恋敵出現」(後書き)

短いです。次回は長くしたいな。次回もお楽しみに

第6話「セカンド幼馴染」

「むっっ」

携帯のアラームで目を覚ます。まだ眠りたい欲求を布団ごと蹴飛ばしてアラームを消す。上半身だけ起きて軽く身体を伸ばす。そして洗面所に行き、顔を洗って目を覚ました後、歯を磨く。

「おはよ」

「ふおはあよ」

ズルズルと足を引き摺りながら速華さんが起きてきた。朝が弱いらしい。最初は起こすのに苦労した。

「今日のー限って何だっけ？」

顔を洗ってもまだ眠たそうな速華さんが聞いてくる。私は今日の時間割を思い出しながら。

「確か四組と合同でISの機動訓練」

「おっし！！頑張るか！！」

そういうと、頬を叩いて目を覚ます速華さんに私は苦笑する。

「相変わらず、座学より訓練が好きだね」

「体、動かせるからな」

そういつて、ニツと笑う。身体は女らしいのにこつこつ仕草が男らしいな。

「なら、早めに朝御飯食べようか」

「だな」

お互いに笑う。その後、制服に着替え、簡単な朝食を取った後、寮の出入り口で光さんと合流してから学校に向かった。

「そついや、二組に専用機持ちの転校生が来たっけ」

「ああ、確か中国代表だっけ？」

二人の話を聞きながらふと、一組の教室に目を向けて驚く。

「あん？誰だ、あのチビツ子」

速華さんがその子に気付く。私は軽いため息を吐いて。格好付けの幼馴染に近づく。

「鈴ちゃん？」

「なによ？」

不機嫌そうに振り向く鈴ちゃんの頭に手刀を叩き込む。

「な、何すんのよ、十夏！……！」

顔を真っ赤にして叫ぶ鈴ちゃん。うん、何時も通り。

「駄目だよ。お兄ちゃん、変に気取った姿見せても普通に対応するから恥掻くだけだつて」

そういつて、微笑む。

「久しぶりに会ったんだから。少しは変わったところ見せたいのは分かるけど。お兄ちゃんの場合、普段通りに見せれば問題ないから」

「そりゃ、そうだけど」

腕を組んで不貞腐れる鈴ちゃん。

「ああ、やっぱり鈴か」

そういつて、嬉しそうに笑うお兄ちゃん。うん、少し周り見たほうがいいと思うよ？ほら、篝さんとセシリアさんの視線が鋭くなってるし。

「ほら、鈴ちゃん。自己紹介」

「なんで、私がそんなことしなくちゃいけないのよ？」

分かってないな。それとも、久しぶりにお兄ちゃんに会えたから舞い上がってる？私は小声で。

「ほら、お兄ちゃんを狙っている子達に自分の有利性を見せ付けなきゃ」

そういつと、鈴ちゃんが気付く。

「そうね。そういうアピールも必要よね」

そういつて、鈴ちゃんが一步前に出る。私は教室から出る。

「初めまして。私は一夏の幼馴染でえっ?!」

鈴ちゃんの言葉が上からの衝撃で途切れる。鈴ちゃんの後ろには無表情のお姉ちゃんが立っていた。

「さーて、私もクラスに戻らなくちゃ」

「ひっでえ」

「いい性格してるわね」

私の言葉に二人は苦笑する。その後、放課後になるとお兄ちゃんからメールが来た。

「面倒だな」

と言いつつ、私は指定された場所へ向かう。そこはISの訓練場だった。中に入るとお兄ちゃんの他に篤さんとセシリアさんがいた。

「おお、来た来た」

お兄ちゃんが嬉しそうに手を振っている。

「どうしたの？ISのコーチなら間に合っただけ」

そういつて、二人を見ると二人がコクコクと頷く。

「ううーん、二人の説明だとよく分からなくてさ。お前から教えて欲しいんだ」

「うわあー、コーチが二人もいて。その言い草は無いと思うな」

まあ、それでも取り敢えずは聞いておこう。何やらISでの『急加速・急制動』が難しいらしい。取り敢えず、二人がお兄ちゃんに教えたアドバイスを教えてもらった。

「はあ」

そして深くため息。篤さん、幾らなんでもその教え方は感覚的過ぎるよ。

「えーっと、先ずは大前提ね。お兄ちゃん、適度に頭悪いから。そういう感覚的な説明とか理論的な説明は理解できないんだよ」

「そうなのか？」

「では、どんな教え方がいいんですの？」

セシリアさんの言葉に少し考えてから。お兄ちゃんを見る。

「お兄ちゃん。弾さんとやったチキンレース覚えてる？」

「ん？ああ、覚えてるぜ」

それなら話が早い。

「それと同じ要領だよ。あの時と同じ感覚でやれば問題ないよ」

そういつて、笑う。実際、私も速華さんとチキンレース感覚で『急加速・急制動』覚えたし。そう考えているとお兄ちゃんが早速練習している。

「「む」」

二人が唸る。丁度、お兄ちゃんが地上、15cm位で止まったようだ。む、私は20cmだったのに。

「それにしても、十夏さんは教え方が上手いですわね」

何処か悔しそうに話すセシリアさん。

「まあ、伊達に兄妹じゃないからね。お兄ちゃんに関しては何でも知ってるよ!!!お兄ちゃんの好みのタイプとかベッドの下にあるアレな本のジャンルとか」

言つて、その中に姉物しか無かったのを思い出し、軽くお兄ちゃんに殺意が沸く。どんだけお姉ちゃんが好きなのよ。

「好みの」

「タイプですか?」

そっちに食いつくか。まあ、当たり前だよな。

「因みに情報料が必要だからね？」

「「へ？」」

二人が驚く。

「だって、家族のプライベートだよ？そしてそれを教えた人がもしかしたら私の義姉になるかもしれないだし。情報料位取ってもいいでしょ？それに今ならお兄ちゃんの写真付き」

そういつて、財布からお兄ちゃんの写真をチラチラ見せる。それに生唾を飲み込む二人。すると篤さんはハツとなり。

「わ、私は聞かんぞ？第一、アイツの好みなぞ興味ないからな！！！！」

「そ、そうですね！！！！私は一夏さんの事なんかこれっぽっちも興味ありません！！！！」

そういつて、腕を組む二人。顔が赤い。むむ？中々強敵だな。蘭ちゃんとは大違いだ。

「助かったよ、十夏」

そういつて、近づくお兄ちゃん。汗臭い。

「役に立てて良かった。流石に模擬戦は無理だけどこれくらいの事なら協力できるよ」

「ん？なんで模擬戦駄目なんだ？」

まったく、この兄貴は。

「あのね。私とお兄ちゃんはお互いクラス代表同士。今度、クラス対抗があるんだよ？なんで、手の内見せ合うような事するのよ？」

「あ、そっか」

ポン、と手を叩く。その反応に私たち三人がため息を吐く。すると、計ったかのように鈴ちゃんがスポーツタオルとスポーツドリンクを持ってきた。

「あ、十夏！！朝はよくもやってくれたわね！！！！」

「えゝ、代表の癖にお姉ちゃんの気配に気付かなかった鈴ちゃんが悪いんじゃない？それとも久しぶりにお兄ちゃんに会えて嬉しかったから分らなかった？」

「んなつ？！そんなんじゃないわよ！！！！」

顔を真っ赤にしてそんなこと言っても説得力無いな。というより、この三人、もう少し素直になれないんだろっか。

「それじゃ、私は部屋に戻るから」

「ん？もう行くのか？」

お兄ちゃんが聞いてくる。さっきの話を聞いていたのだろうか。

「言ったでしょ？私とお姉ちゃん。それと鈴ちゃんは敵同士になる

んだから。それなりに対策とかISの整備とかしなくちゃいけないの。それにお邪魔虫は早々に退散したほうがいいでしょ?」

最後の言葉に三人が顔を赤くする。お兄ちゃんは首を傾げる。うむ、そろそろお兄ちゃんの朴念仁をどうにかしないと皆が可哀想だ。そう思いながら、外に出て、この後どうしようか悩んでいると、
篤さんが出てくる。

「十夏」

「何でしょう?」

「二人部屋とはいいいものだな!!!!!!」

「はい?」

そのまま、篤さんは歩いていく。何を言いたいのか今一つ分からないのだが。

「おや? トオカじゃないか。どうかしたのか?」

「ティエリアさん?」

すると、ティエリアさんがやってきた。『白式・七剣』の製作者、という立場上IS学園で仕事をしているのだ。内容は主にISの整備関係の手伝い、というらしい。

「いや、お兄ちゃんに呼ばれたんです」

「ふむ、その様子だともう、用事は終わったようだな。彼は中にい

るのかな？」

「いますけど、今は中に入らないほうがいいと思います」

そういつて、中を指で示す。そこにはなにやら口論している鈴ちゃんとお兄ちゃん。それを遠巻きに見るしか出来ない、セシリアさんだった。

「そのようだ。なら、もう少し時間を潰してくるとしよう」

「あ、ティエリアさん。もし良かったら一緒に夕飯どうですか？」

「いや、また今度にするよ。それじゃ」

そういつて、歩いていくティエリアさん。失敗か。

「残念。でも次こそは誘ってやる!!」

拳を強く握る。そうと決まれば、早速料理の練習。丁度私の部屋には大食らいがいるので作りすぎには困らないのだ。

「彼女には悪いことをしたな」

そういつて、デスクに座りPCを起動する。

「それに彼にも言いそびれたが、まあ伝える機会はまだある。急ぐことはないな」

そんな事を考えていると携帯が鳴る。見ると非通知の文字が浮かんでいる。

「また彼女か」

ため息を吐きながら、通話ボタンを押す。

張り切って作ったはいいけど、調子に乗りすぎた。私はテーブルに並んだ料理を見て苦笑する。

「これは流石に作り過ぎだね」

「そうだな。流石に私でも食べ切れないわ」

速華さんも苦笑している。ふむ、それなら。

「お裾分けかな」

取り敢えず、日持ちする奴をタッパーに詰める。

「光さんにティエリアさん……は部屋分かんないから無し。お兄ちゃんか」

そういつて、外に出る。因みに光さんの所には速華さんに行つて貰つた。

「あゝ、もしかして皆、夕飯食べ終わつてるかも」

そんな事を考えながら歩いていくと。

「最つつつ低！！！！！！女の子との約束を覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！！！！犬に噛まれて死ね！！！！！！」

そんな怒声が聞こえたと思つたら凄く速さで鈴ちゃんが私の横を通り過ぎた。嫌な予感を覚えつつもお兄ちゃんの部屋に向かうと、赤くなった頬を摩っているお兄ちゃんと不機嫌そうな篤さん。それを見て何があつたか何となく分かつた。

「お兄ちゃん。追わないの？」

「やっぱ追つた方がいいのか？」

呆れた。私は手に持っていたタッパーを放り投げる。それを危なげなく受け取るお兄ちゃん。

「鈴ちゃんは私が追うから。お兄ちゃんは鈴ちゃんに対してどうすればいいか、考えること。いい？」

そういつて、走り出す。さて、何処にいるかな？

「見つけた」

あれから十分くらい探していると寮の入り口にある花壇に鈴ちゃんが腰を下ろしていた。

「鈴ちゃん」

「……………十夏」

顔を上げた鈴ちゃん。見ると泣いていたのか、少しだけ目元が赤い。私は息を整えて隣に座る。

「何か用？」

「もう、そんな邪険にしないでよ。お兄ちゃんじゃなかったのは悪かったけどさ」

そういうと鈴ちゃんが赤くなる。やっぱりお兄ちゃんが追って来てくれると思っていたらしい。

「ねえ、一夏ってさ。女心分かってないよね？」

「そんなの、今に始まったことじゃないよ」

そういつて、笑うと鈴ちゃんも少しだけ笑う。そして鈴ちゃんが先ほどの原因を話し始める。

「うわ、それ絶対お兄ちゃんが悪いじゃん」

「そうよ。このアタシとの約束を勘違いするなんて」

「まあ、正直に言わなかった鈴ちゃんも悪いけどね」

「うぐ……」

鈴ちゃんのリアクションにクスクスと笑う。それから鈴ちゃんがお兄ちゃんに対する愚痴を言い始める。それに私が相槌したりする。

「何よ、十夏。なんか可笑しい？」

自然と笑っていたらしい。

「なんか不思議だなんて。前はさ、私が愚痴とか言う方だったからさ。覚えてる？」

「まあね。殆ど一夏に対する不満だったわね。後、たまに千冬さんだっけ？でも大袈裟じゃない？愚痴聞いただけなんて」

「でも、今まで私の愚痴聞いてくれる人なんていなかったから、凄く嬉しかったんだよ？」

「そ、そう？」

申し訳無さそうにしている鈴ちゃん。今なら分かる。私の愚痴を

聞いてくれた時、鈴ちゃんは私の為に聞いてくれたんじゃない。あの時、どうやってお兄ちゃんの気を惹こうかと思って丁度私がいたから利用したのだ。でも、嘘だったとしても、自分を織斑一夏の弟でも織斑千冬の妹としてではなく、織斑十夏として見てくれた最初の友達なのだ。

「だからさ、ずっと恩返しがしたかったんだ」

「私の愚痴を聞くのが恩返し？」

鈴ちゃんの言葉に頷く。

「うん、残念だけどそれだけ。あの時、言ったよね？私は中立の立場だって」

「そうね」

鈴ちゃんが頷く。

「ねえ、十夏」

「なに？」

「一夏って好きな人いるの？」

鈴ちゃんの言葉に少し考える。

「そうだね。お兄ちゃんの事を好きな人はいるけど。本人は今の所いないと思うよ」

「そつか。因みにライバル。どれくらい増えた？」

「一人かな。鈴ちゃんの前にいた篝さんは前に話したから知ってるでしょ？後はセシリアさんだね」

そういつと、鈴ちゃんが少しだけ唸る。多分、怒りの矛先はお兄ちゃんだろう。あの人のべつ幕なしに女の子を惚れさせるから。困った人だよね。

「それでお兄ちゃんとはどうするの？」

「当然。アイツが謝るまで許してやるモンですか！！！！」

グツと拳を握って宣誓する鈴ちゃん。

「じゃあ、お兄ちゃんが話しかけてきた時は無視しない様にしなくちゃね」

「う、うん。けど、やっぱり怒った手前、素直に話を聞くのも何か変じゃない？」

鈴ちゃんが頬を掻く。

「じゃあ、怒ったフリしながら聞いてあげれば？お兄ちゃん、そこるところ超鈍いから。見た感じ『私不機嫌ですよ』って見せれば問題ないと思う」

そういつて、頬を膨らまして腰に腕を当て、怒ったフリをする。それを見て鈴ちゃんが噴出す。同時に鈴ちゃんのお腹が鳴った。

「良かったら一緒に夕飯食べる？」

「うん」

その後、部屋に戻るとテーブルに突っ伏している速華さんを見付けた。どうやら律儀に待っていてくれたらしい。

「さて、鈴ちゃんが謝るまで許さないって発言をしてから結構経ったね」

「そうね」

鈴ちゃんが申し訳無さそうにしている。

「なんで二人の仲が改善されてないの？」

「それは、その。一夏が悪いのよ！！！！よりもよって私の事をひ……貧乳ですって。確かに私は十夏よりも胸とか身長とか小さいわよ。悪かったわね！！！！！！」

「なんで、そこで私に当たるかな。ていうか、少し怒ったフリしてお兄ちゃんに謝罪させるんじゃないかったの？それがなんで、あんな口喧嘩に発展したのか、詳しく聞きたいんだけど？」

私が詰め寄ると、鈴ちゃんは視線をずらす。

「それは、その。やっぱり面と向かい合つと」

「恥ずかしい？」

聞くと、鈴ちゃんが頷く。私はため息を吐く。

「どうすんの？このままだと他の二人にリードされたり、別の子が現れるよ？それに蘭ちゃんだって来年には入学するつもりだろうし」

「うー」

頭を抱え、唸り始める。まあ、こうなってしまうてはどうしようもない。

「とにかく今はクラス対抗に専念したほうがいいのか？お兄ちゃんの事はクラス対抗が終わってから考えよう？」

「……………うん。そうね、今は目の前のことに集中しなくちゃ。十夏、言っとくけど手加減なんかないからね？」

こついつ切り替えの速さは感心するな。

「勿論、手加減なんてしたら怒るからね」

そういつて、笑う。どうやら鈴ちゃんにとって一回戦のお兄ちゃんとは敵ではないらしい。

「完成~~~~」

そういつて私は回転する椅子の上で喜ぶ。

『カンセイ!!カンセイ!!』

すぐ隣では私の言葉を真似する黄色いボール。ティエリから借りた『ハロ』がピカピカと目を光らせる。私はハロを抱きしめて。

「ふっふっふ。ティエリの驚く顔が目には浮かぶね。楽しみだな、早くいつくんの試合当日にならないかな」

そういつて私は今完成したモノを見る。二対の目が赤く輝く自信作を。

「前に作った子もいいけど、『君達』もどんな活躍を見せてくれるのか。楽しみだな」

『タノシミダ!!タノシミダ!!』

その日の私はずっと上機嫌でした、まる。

第6話「セカンド幼馴染」（後書き）

どうも、作者です。今回は鈴登場からクラス対抗前までです。そして何か企んでいる東博士。さて、彼女は何かを作ったんでしょう？まあ、勘の鋭い人は分かると思いますが。書いてみて意外と長いですが、皆さん。大丈夫でしょうか？もう少し短くしたほうがいいのかな？次回をお楽しみに

第7話「決戦・前編」

「さてさて、始まっちゃうね」

「十夏さん。何だか楽しそうですね」

「そりやそうでしょ。だって一組と二組の対戦が先に見れるんだよ？勝った方の戦い方も分かるし、それによって対抗策も考えられるんだもん。楽しいわけないよ」

まあ、それだけじゃないんだけどね。

「十夏は一夏の応援をするのか？」

隣にいる篤さんが話しかけてきた。因みに私の両隣にセシリアさんと篤さんが座っているのだ。本当は速華さんや光さんと一緒に見たかったのだが、二人に声を掛ける前に篤さんに連行されたのだ。

「どうしよっかな。幼馴染との約束を履き違えた馬鹿兄貴を応援したほうがいいのかな？」

「それを聞かれると返答しづらい」

どうやら篤さんと思うところがあるようだ。

「かといって、中学で出来た初めての友達を応援しないのも悪いじゃない？まあ、本当の所。お兄ちゃんより鈴ちゃんを応援するつもりなんだけどね。だって、お兄ちゃんを応援する人、二人も確定してるんだもん。私まで加わったら鈴ちゃんが可哀想だからね」

笑って言うと、両隣の二人が顔を赤くする。そこでふと気付く。そういえば、お兄ちゃんを応援するのは後一人いたっけ。

「試合開始まで五分を切ったが、どう思うティエリア？」

視線だけはアリーナに向けながら、彼女は僕に問う。僕は腕を組みながら。

「そうだな。僕としてはこの試合はとても興味深い。未だ『白式・七剣』はその総てを曝け出していない。そして操縦者でもある彼もまだ素人同然だ。そして相手はデータなどを見る限り、最初の相手であるセシリアとは違う戦い方をするようだ。これは彼にとってもISにとってもいい経験になるだろう」

彼女が作り出したISは自己進化する機械。まったくんでもないモノを作りだした物だ。そしてその動機が『興味』という唯一言なのだ。まあ、その動機に僕とチフユが関わっているのは否定できないが。

「確かに一夏にとってこの戦闘はいい経験になるだろう。だが、私が聞いているのは一夏の事ではない」

その言葉にチフユの隣で椅子に座っているマヤが首を傾げる。僕

は浅くため息を吐くと。

「乱入の可能性は高いだろうな。祭りや大騒ぎが好きな彼女の事だ。前回は様子見、もしくは突発過ぎて彼女の想定外だっただろうが、今回は定期的なイベントだ。彼女も何かしらのアクションを取ってくるだろう。問題は」

「どんな手段で乱入してくる、か」

そう呟くと同時に試合開始の合図が鳴った。

咄嗟に動かししたGNソードに重い衝撃が走る。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない」

そう言いながら、両端に刃の付いた青竜刀をバトンのように回転させながら攻撃してくる。流石にGNソードだけでは受けきれないと悟り、左手にGNブレイドを持って鈴の猛攻を防ぐ。

「中々やるじゃない。でも」

ぱかっと鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光り、俺は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

「なるっ！！！！！！」

吹き飛びながらGNソードとGNブレイドから手を離し、腰のGNビームダガーを鈴に投げつける。そして地面に激突する直前、急制動を掛けながら、放り投げた二刀を拾う。

「へえ、まぐれにしてはやるじゃないの」

鈴の声に空を仰ぐと、先ほど開いた肩アーマーの片方にダガーが刺さっていた。もう片方は弾かれたのか地面に落ちている。

「けど、砲身はまだあるのよ？覚悟は出来てる？」

そういつと、もう片方のアーマーから衝撃が飛んできた。

「最初はヒヤッとしたけど、なぁんだ衝撃か」

けど、少し安心した。アレならフィールドを抜けられる心配はない。

「確かに十夏さんのヴァーチェならあれくらいは痛くも無さそうですけど」

「まあ、お兄ちゃんにはきついかもね」

そういつて、会場を見る。そこでは鈴ちゃんの衝撃砲に翻弄されるお兄ちゃんがいた。

「ううん。あの衝撃砲。威力はともかく、次弾のタイムラグが殆ど無いのは厄介だな」

しかも、意図的に感覚をズラしている時もあるようだ。これじゃ、少し辛いかもしれない。もし、鈴ちゃんと戦うときはあの衝撃砲に対応するのが最優先ということになる。私のヴァーチェにはIS自体に対して最強の切り札を持っている。けど、それは『最悪の事態』になった場合のみ。

「なんか、ワクワクするな」

そう言って私は会場を見る。

さて、どうするか。

「よく避けるじゃない。けど、避けてばかりじゃ勝てないわよ」

確かにその通りだ。けど、未だ俺の頭には打開策が浮かばない。

「おっと」

ブレーキを掛けながら方向転換する。取り敢えず、考えても仕方が無いか。

「そんじゃ、反撃と行きますかね」

そういつて、俺は鈴に向かってGNブレイドを二本投げる。即座に衝撃砲『龍砲』でGNブレイドを弾き落とす。少し近づけた。けど、まだ遠い。

「もう一丁！……！」

肩のビームソードを調整してダガーに切り替え、投げつける。

「アンタ、何本持ってんのよ！……！」

怒声と共に『龍砲』で迎撃する。この距離ならいける。

「それは内緒だ！……！」

叫びと共に『イクニッシャット瞬時加速』で近づく。

「そんなの丸分かりよ！……！」

それに対応してくる鈴。互いの刃がぶつかる寸前、アリーナに大きな衝撃が響いた。

「何！？」

見るとステージ中央から煙が立っている。どうやら『何か』がア

リーナの遮断シールドを突破したようだ。すると、鈴から通信が入った。

『一夏、試合は中止よ。直ぐにピットに戻って！！』

鈴の声が聞こえた瞬間、ハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

『ステージ上空に熱源。所属不明のISと断定。ロックされている』

「嘘だろ！？」

叫びながら、移動する。同時に上空から青い弾が降り注ぐ。

「鈴大丈夫か？」

『私より自分の心配しなさいよ。こっちは大丈夫。けど、なにあのIS』

鈴の言葉と共に攻撃が止む。俺も鈴に倣って上を見上げる。

「なん……………だ……………アレ？」

そこには人型の上半身に巨大な箱型の下半身が合体した異形が静かに佇んでいた。

第7話「決戦・前編」（後書き）

どうもフィロです。今回は乱入者の登場までです。次回も戦闘です。次回は少々派手に行きたいと思うのでご期待ください。

第8話「決戦・中編」

いきなりの侵入者は俺に狙いを定めたのか、手に持っているライフルを撃ってくる。

「くっ!？」

それを避け、避けきれないものを持っているGNソードで弾きながら距離を取る。すると、下半身の前部が展開し、光が収束する。

「マジかよ!？」

直ぐに『イグニッション瞬時加速』で射線から離れる。瞬間、収束した光がさっきまで俺がいた場所に放たれ、爆発する。

「あんなの、喰らったら。骨も残らなさそうだ」

何せ、遮断シールドをも貫通する代物だ。ISのシールドも同様に貫通できるだろう。そう、考えていると敵ISが一瞬、揺れる。

「鈴?!」

見ると、鈴が『龍砲』で侵入者を攻撃していた。そして通信が入る。

『一夏、今のうちにピットに戻って。此処は私が食い止める!!!』

「馬鹿言っな!!!!さっきの砲撃見たろ!!!!あんなの喰らったら一たまりも無いぞ!!!!それにお前の衝撃砲だって片方しかない

んだぞ!？」

『じゃあ、何か打開策があるの？遠距離兵装を持ってない一夏に何
が出来るの？』

「動き回って囷になる。その間にお前はピットに戻れ」

『馬鹿!!!!!!格好付けんじゃないわよ!!!!!!アンタ、私との戦
いでどれだけシールドエネルギー減ったか分かってんの!!!!!!』

鈴の怒声が響く。同時に侵入者が鈴に向きを変える。

「鈴!!!!!!」

即座に移動する。同時に侵入者が迎撃してくるがそれを避ける。

「馬鹿!!!!!!こっち来てどうすんのよ!!!!!!」

怒鳴られるが、無視して鈴を突き飛ばす。同時に何か重い物がぶ
つかる衝撃。

「ぐっ?!」

「一夏?!」

鈴の叫びを聞きながら、GNソードを振るも、直前で後ろに後退
したのか、装甲を浅く傷つける事しか出来なかった。

「くうっ」

そして上半身の腕がGNソードを掴み、俺ごと地面に投げつける。地面との衝突はギリギリで回避出来た。そして箱型の下半身から蜘蛛の様な足が左右に三本ずつ、計六本飛び出して、楔の様に地面に刺さる。そして展開した前部がスパークしたと感じた瞬間、全身に痛みが走った。

「嗚呼嗚呼ああアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
あああああああああああああああああああああゝあゝ
ああああああああああああああああああああああああ
あああああツツツツツツツツツツ」

「一夏!!!!!!」

叫びと共に『龍砲』を撃ちながら、接近する。足場を固定しているせいか、ISは小揺るぎもない。それに歯噛みしながらも手に持った青竜刀で斬り付ける。

「一夏から離れるオオオオオッ!!!!!!」

叫び、何度も斬り付ける。するとISは器用にジャンプして離れた。

「一夏！……！！！」

直ぐに一夏を見る。どうやら意識はあるようだ。

「大丈夫！？一夏！！！」

「ぐっ」

プスプスとISから煙が出ているものの、一夏の身体には（見える部分だけだが）何処も異常は無さそうだ。

「ああ、くそ！！！！一瞬、綺麗な河とお花畑が見えた」

「次見えても、絶対に渡ったら駄目だからね？」

良かった、大丈夫みたい。

「無事なら、さつさとピットに戻りなさい。さっきの攻撃でシールドエネルギーも無くなったでしょ？」

「いや、可笑しな事にさ。体当たりのダメージはあるんだけど、電撃のダメージはまったく無いんだよ」

「はあ？じゃあ、何？さっきの電撃はシールドエネルギー貫通してパイロットに直接ダメージ与えてるの？」

私の言葉に一夏が頷く。

「だったら尚更、アンタはピットに戻りなさいよ」

「お前、さっきの見てたろ！？もし、俺がいなくなつて電撃喰らつたら、誰が助けてくれるんだよ！？」

そんな口論を続けながら、疑問に思う。何故、相手はこんな好機に攻撃をしてこないのだろうか。

「ねえ、変じゃない？」

「え？確かに変だな。なんでアイツ、攻撃して来ねえんだ？」

私達の視線の先には静かに佇んでいる謎のIS。まるで私達の行動を観察しているみたいだ。そう思っていると、下半身がスパークし始める。

「また来るわよ！！！」

『織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！！！』

『！』

「分かってますけど、相手が私たちに狙いを定めている状態でどうやって脱出しろと！？」

敵の攻撃を避けながら、アナウンスをしている先生に反論する。

「まったく、彼女の行動には驚かされるばかりだ」

「ティエリアさん！！そんな呑気に構えている場合ですか！？」

あまりにも呑気なティエリアさんの口調に思わず食って掛かる。

「だが、慌てて事態が解決する訳ではないだろう？今、僕たちに必要なのは冷静に対処することだ」

「ティエリアの言う通りだ」

そういつて、千冬先生はコーヒーを淹れている。

「今はコーヒーでも飲んで落ち着こうじゃないか」

そういつて、千冬先生が微笑む。

「チフユ。それは塩だ」

「……………」

ティエリアさんの指摘通り、千冬先生が持っていたのは塩だった。しかもでかかと塩と書かれていた。

「なぜ塩があるんだ？」

「さ、さあ。あつ！！やっぱり弟さんが心配なんですネ！？だからそんなミスを」

言って気付く。ティエリアさん、なんでそんな哀れんだ視線で見

ているのでしょうか？

「山田君」

「は、はい！！」

この日から私は千冬先生に家族関連で話を振る事を止めました。

「お兄ちゃん、聞こえる！！！」

私はピットでお兄ちゃんに通信を送る。だが、帰ってくるのはノイズばかり。

「ここまで近づいても駄目か」

「くっ！！目の前に一夏がいるのに何も出来ないとは」

「歯痒いですわ！！」

隣にいる篤さんとセシリアさんが呻く。

「せめて、通信できれば」

そう思っていると、後ろで何かが動く音がした。

「何？」

後ろを振り向くと、そこにはバスケットボール位の大きさでオレンジ色の。

「ハ口？」

私の言葉に反応したのか、ハ口は（原理は不明だが）元気よく跳ねる。

『トオカ！！トオカ！！』

ふと、私はハ口の口部分に小型端末が挟まっているのに気付く。

「これって」

『ツカエ！！ツカエ！！』

ハ口の言葉と共に端末をハ口に繋げ、ハ口の口からコードを伸ばし、壁に付いている端末に繋げる。

「お願い、間に合って……………！！！」

「くっそ!!!」

悪態を吐きながら、体当たりを避ける。同時に地面に落ちていたり、刺さっている剣を拾い、武装ラッチに収める。

「さっきから体当たりばっか。もしかしてエネルギー切れかしら？」

鈴の言葉通り、確かにさっきから攻撃は体当たりや、足を展開しての格闘攻撃。それもかなりお粗末だ。

「にしても、さっきから一言も話さないな。本当に人が乗ってんのか？」

「なに、馬鹿な事言ってるよ。ISは人が乗らないと動かないのよ？」

確かにその通りなのだが、何と云うか、動きに『人間味』というのが欠けているような気がする。

『……ちゃん!!!……える!?!』

そんな時、ノイズしか聞こえなかった通信に聞きなれた声がした。

「十夏なのか？」

『よかった。今度は通じたみたい』

通信の向こうで十夏が安心したように息を吐く。

「お前、避難してなかったのか？」

『そんな事はどうでもいいの！！！時間が無いから手短に説明するわよ？』

俺の意見を聞かずに十夏が喋る。

『私とお兄ちゃんのISに組み込まれている特殊システム『TRANS-AM』について説明するよ？』

「トランザム？」

『このシステムはGNドライブ内部にある高濃度圧縮粒子を全面開放することで、一定時間機体スペックを三倍にする事が出来るシステムなの』

「三倍に！？本当か？」

『話は最後まで聞く！！いい？このシステムにはデメリットが二つあるの。一つは制限時間。もう一つは通常状態に戻ったときに大幅なスペックダウンを引き起こすの。言っている意味、分かるよね？』

「つまり、システムを作動したらさっさと敵を倒せて事か？」

『そういう事、分かったら。今から指示する通りにプログラム打ち込んで。システムの解除コードを言うわ』

「お、おう」

言われた通りにプログラムを打ち込むと浮かんでいたディスプレイ

イが赤く染まり『TRANS-AM』と文字が出た。

『出てきたね？これで何時でもシステムを作動できるよ。作動の仕方は音声入力でシステムの名前を言つか、さっきやったプログラムを打つだけ。分かった？』

「サンキュ、十夏。行くぜ！！トランザム！！！」

叫びと共に背中中のGNドライヴが唸り『白式・七剣』の装甲が赤く輝く。同時にディスプレイにはシステム残り時間が現れる。

「げっ！？二分しか無いのかよ」

本当に短期決戦用なんだな。っと、驚いてる場合じゃないな。

「鈴、後は任せろ！！！」

「はあっ！？アンタ、何言って」

鈴の言葉を背中に聞きながら、俺は空を駆ける。同時に両肩にセツトされているビームソードを抜く。

「あれが十夏の言っていたGNドライヴの能力」

「けれど、一夏さんのISには既に能力があつた筈でしたが」

「うん、お兄ちゃんのIS『白式・七剣』自体の能力はGNソードを展開して現れる『バリア無効化攻撃』あの『TRANS-AM』システムはGNドライブの固有能力だよ」

そう、私のヴァーチェにもISとしての固有能力がある。滅多に使うとは思わないが。

「取り敢えず、二人とも私の後ろに下がって」

「何をするつもりだ？」

箒さんの言葉に私は笑つて。

「邪魔だからその遮断フィールド吹き飛ばすの」

そういつて、私はヴァーチェを起動する。

『フキトバスゼ!!!フキトバスゼ』

ハ口の応援(?)を背中に受け、私はGNバズーカを腹部に接続する。GNバズーカが展開する。

「本当に大丈夫なのか？」

箒さんの言葉に私は苦笑する。

「大丈夫だよ。ヴァーチェの火力を甘く見ないでね。それと、セシリアさん。今のうちにISを展開しておいて、フィールドを突破し

た後、直ぐにアリーナに入れるように」

「分かりましたわ」

そういつと、セシリアさんがISを起動する。

「GNバズーカ。バーストモード、発射」

言葉と共にトリガーを引く。

「ハアアアアッ！！！！！！！！」

弾丸を避けながら、俺は敵ISに接近する。同時に敵ISが足を展開して、対応してくるが。

「遅いぜ！！！！」

右手のGNビームソードで足を一本切断し、下半身に突き刺す。そしてそのまま、流れるように反対側の足を左手のビームソードで一本切り、同じように突き刺す。

「まだまだアッ！！！！！！」

叫びと共に腰の武装ラッチからGNブレイドを二本抜き放つ。同

時にISが突進してくるが、それを時計回りに回って避け、すれ違い様、足を二本切断、ブレイドを二本突き刺す。片側の足を総て切られた敵はバランスを崩す。そこにすかさずGNダガーを投げる。二本の内、一本が展開した前部に刺さり、小さな爆発を起こす。

「これで!!!」

右手に構えたGNソード『雪片式型』を構え、『瞬間加速』イグニッションで近づきながら、残りの足も切り捨てる。

「終わりだアアッ!!!!!!」

そしてエネルギー刃を展開した『雪片式型』で切り裂く。そして同時にトランザムシステムが切れ、『白式・七剣』は元の白い装甲に戻る。数瞬の間を置いて、敵ISの下半身が爆発する。そして上半身は下半身から飛び出した。やはり思った通り、下半身と上半身は別々の様だ。そう思っていると、ピットで轟音が聞こえた。

「今度は何だ？」

見ると、ピットがある場所から煙が立ち込めている。そしてそこからブルー・ティアーズを展開したセシリアとヴァーチェを展開した十夏が出てきた。

「っ!?!お兄ちゃん、下がって!!!!!!」

十夏の切羽詰った声に従い、後ろに下がる。同時に俺がいた場所に赤い閃光が幾つも突き刺さり、煙を上げる。見上げると、そこには同じ形状の『全身装甲』フルスキン製のISが浮かんでいた。

「次から次へと、今度は何だよ！！！！」

思わず叫んでしまう。そいつ等は鈍く輝く銀色のボディに無機質な二対の赤い瞳を灯らせながら、俺たちを静かに見つめていた。

第8話「決戦・中編」（後書き）

どうも、作者です。今回は『アグリツサをトランザムでダルマにする』の巻でした。そして乱入してきた謎のIS!!!!まあ、分かりますよね。次回もお楽しみに。修正しました

第9話「決戦・後編」

空に浮かぶ四つのISは最初にやってきたISを守るように展開している。

「鈴ちゃん。今すぐお兄ちゃんを連れてピットに戻って。今ならフイールドも消えてるし、間に合うから」

「分かった。無茶だけはしないでよ」

「おい、鈴。勝手に決めんなよ！！！！俺はまだ戦えるぞ！！！！」

私はGNバズーカをお兄ちゃんの足元に撃つ。

「さっさと行け馬鹿兄貴！！！！シールドエネルギーも粒子残量も心許ない足手纏いはハッキリ言って邪魔なの！！！！」

言い返せないのか、お兄ちゃんが俯く。その姿に少しだけ胸が痛くなった。

「ほら、行くわよ」

鈴ちゃんがそういつて、お兄ちゃんを連れて行く。

「辛いですわね」

「そんな事無いよ。寧ろ、これで気兼ねなく暴れられるから」

そういつて、目の前の敵に集中する。そしてGNバズーカのトリ

ガーを引く。ピンク色の粒子が飛んでいくも、簡単に避けられる。しかも、さっきのバーストモードで粒子残量が心許ない。早々に決着を付けないと危ない。そう考えていると、敵ISは発砲。私とセシリアさんは上昇。同時に敵ISも散開。二機編成で私たちに向かう。

「ノルマは二機だね」

「簡単に言ってくれますわね。まあ、難しくはありませんけど」

言葉と共に私に向かった二機が円を描くように動きながらビームを撃ってくる。

「そういえば私、多対一のシミュレーションやったこと無かった」

そう呟きながら、ビームを避ける。そして肩のGNキャノンを発射する。それを回避するISだが、二機の内、片方が被弾。右腕が吹き飛ぶ。

「ヤバッ！？つて、え？」

一瞬、グロテスクな展開を考えたが、吹き飛んだ腕の接合部に生身の部分が無かったのだ。

「もしかして、無人機？」

そう考え馬鹿な、と考える。ISはティエリアさん曰く『地上最強の兵器であり、欠陥機』だという。確かにISは最強の兵器だ。だが、それは人が搭乗している。という絶対条件が必要だ。人が扱わなければ最強と証明できない兵器。それは現在、地上で活躍して

いる兵器の全てに言えるだろう。

「でも、現実を考えてあのISは無人機の可能性が高い」

そう、考えながらビームを回避する。そんな考えをしながら私はため息を吐く。

「無人機云々はティエリアさんに任せよう。今はこいつ等を何とかしないと」

そういつて、GNバズーカを発射。それを避ける二機の回避場所にGNキャノンを撃ち込む。先程、右腕を吹き飛ばしたISは回避が間に合わず着弾し、爆発して真っ赤な粒子を辺りに降らせる。

「この粒子。もしかしてGN粒子？」

そう考えていると、生き残ったISが向かってくる。考えるのは後にしよう。

「くっ」

手強い。そう感じながら、敵のビームを避け、応戦する。だが、それもギリギリで避けられてしまう。

「なら、ブルー・ティアーズ!!」

叫び、四基のブルー・ティアーズが二機のISにオールレンジ攻撃を仕掛ける。だが、撃墜したのは一機だけだった。残りの一機は中破したものの、健在である。そして敵の反撃が始まる。

「くっ!! やりますわね」

こちらの攻撃を正確に避け、すかさず反撃してくる。そのあまりにも機械的な動きに本当に人が乗っているのか、と考える。すると、通信が入った。

『二人とも、聞こえるか?』

「ティエリアさん?」

ティエリアさんから通信が入る。それを聞きながら敵の攻撃を避ける。

『どうやら敵ISは無人機の様だ』

『そんな馬鹿な!?』

「けど、それならあのISの機械的な動きとかは説明できるよね。」

それに無人機の証拠はあるんですよね？」

『ああ、先程から敵ISにサーモセンサーを使って確認した』

まあ、無人機なら手加減はいらないよね。

「トランザム！！」

言葉と共にGNドライブが唸り、装甲が赤く輝く。

「セシリアさん、誘導。お願い」

『分かりましたわ』

詳しく指示は出さない。それでも、セシリアさんは私の意図を解ってくれた。私とセシリアさんって相性がいいのかな？

『ブルー・ティアーズ』

四基の内、一基破壊された移動砲台が二機のISを一箇所に集める。

「フルバースト！！！」

両肩のGNキャノンとバーストモードのGNバズーカによる最大出力のビーム攻撃に二機のISは文字通り塵に成り果てた。

『それ、実戦では使わないほうが良いですわね』

「うん、私もそう思う」

物凄く危ない。

「後は、最初に乗り込んだ奴だけど」

眩きながらハイパーセンサーでISを探すも見当たらない。逃がしたようだ。

「これで終わりだと嬉しいんだけど」

正直、これ以上侵入者が来ると辛い。

「取り敢えず、ブルー・ティアーズのセンサーには反応はありませんわ」

『こちらのレーダーでも敵影は感知できない。増援の可能性は低いだろう。ピットに戻ってくれ』

ティエリアさんの言葉を聞き、私たちも頷きピットに向かう。その後、無断で出撃した事をお姉ちゃんに怒られた後、アンノウンを撃退したことで少しだけ褒められた。

「む~~~~~~~~」

帰って来たISの録画記録を見終わって、私は唸る。

「悔しい〜〜〜〜！！！！！！」

そう、叫んでバタバタと手足をばたつかせる。その際、腕や足が積み重なったデータディスクを崩すが、興味が失せた物なので問題ない。

「なに、このトランザムってシステム。ティエリ、ズルイ〜〜」

そうして暫く唸ったり叫んだりして鬱憤を晴らした後、嬉しくなる。結果は見事に惨敗だったが、見返りは中々の物だ。

「トランザムかあ〜〜。面白いな」

本当、ティエリは飽きさせないな。うんうん、遊び心がちゃんと解ってる。

「ティエリは凄いね」

『スゴイ！！スゴイ！！』

ハ口も同意してくれる。ふと、調整中のISに目を向ける。

「そのISにこのシステムを付けてみよっか」

ちょっと難しいけど、それがいいよね

第9話「決戦・後編」（後書き）

クラス対抗戦終了！！！！なんか、久しぶりに戦闘シーン書いたから疲れました。そしてなにやら暗躍する束さん。では次回もお楽しみに。修正しました。

第10話「休日」

「暇だな」

『ヒマダー！ヒマダー！』

私の呟きに床で転がっているハロが喋る。

「そういえば、お兄ちゃんは弾さんの所に行ってるんだっけ？」

一緒に行くのを遠慮してしまったが失敗だったな。そう、考えていると部屋のドアがノックされる。因みに速華さんは光さんと一緒に家に戻っている。

「はい。って、鈴ちゃん？どうしたの？」

扉を開けると鈴ちゃんが立っていた。

「その様子じゃ、暇を持て余してたみたいね」

「まあね、それで何？一緒に暇つぶししてくれるなら嬉しいな」

『ウレシイナ！ウレシイナ！』

私の言葉にハロが飛び跳ねる。それに少し驚きながら鈴ちゃんが頷く。

「私も暇だし。じゃあ、模擬戦でもする？」

笑顔でそう提案してくる鈴ちゃん。言われ、少し考える。

「うん、いいよ。んじゃ、先に許可申請出しといて」

「了解、今なら第三アリーナが空いてるから、準備が出来たら来なさい」

「りょーかい」

『リヨウカイ！！リヨウカイ！！』

その後、ハ口を連れて第三アリーナに向かう。

「やはり、見間違いではなかったか」

そういつて、僕は視線をPCから外す。次いでメガネを外し、疲れた目を解す。

「まさか、貸していたハ口の中にあつた『ヴェーダ』に侵入出来ていたとは、彼女の力量を測り間違えていたな」

そこでこの世界に来てから何度目かの思考に入る。あの『ELS』との対話が終わり、刹那と僕は一度地球に戻った。ただし、僕は宇宙にある『ソレスタルビーイング号』で事前に製造していた新しい

肉体に自分の人格とハロに『ヴェーダ』の一部を移していた筈だ。そしてその作業が完了した後、目を開けた僕が見た物は暗い部屋ではなく。

「ハロを抱えた幼いトオカとチフユ……………か」

何故、この世界に自分がいるのか。

「此処にいたのか」

ふと、背後で声が聞こえた。視線だけ動かすと、入り口にチフユが立っていた。

「どうかしたのか？」

「さっき、鳳が第三アリーナの使用許可を出してきた。何でも十夏と模擬戦するらしい」

「そうか」

そういつて、僕はPCに視線を向ける。背後でチフユがため息を吐く。

「全く、人が折角気分転換を勧めたのに。それは無いだろう？」

「生憎、気分転換する必要が無い」

そういつと、チフユが一際大きなため息を吐く。

「まあ、いい。それで？解析は進んでいるか？」

「彼女たちには悪いが、もう少し破片を残して欲しかったな。そうすれば後、半日早く片付けられた」

「お前が、愚痴を言うのは珍しいな。まあ、解析は終わったのだから？それで？」

チフユが問い掛ける。僕は身体をチフユに向け。

「非常に厄介だ」

「それは元からだろう？」

チフユの言葉に確かに、と苦笑する。

「君には僕が未来の人間だと話したな」

「ああ、それも二百年ほど未来の」

頷く。

「そうだ。その証拠に僕は君とトオカ、タバネに八口の中にあったデータを幾つか見せた」

「確か『軌道エレベーター』に『宇宙太陽光発電システム』三大家の『ユニオン』『AEU』『人類革新連盟』そして戦争根絶を掲げ、あらゆる戦争行動に武力で介入する『ソレスタルビーイング』そして彼らが所持する四機の『ガンダム』だったか」

「そうだ」

淀みなく答える彼女は流石だろう。

「それで、それがどうしたんだ？」

「実はタバネが僕から借りた八口の中にあつたデータベースを覗いたようだ」

そういうと、チフユがとても嫌な顔をする。

「何故、そんな簡単に破られるように作つたんだ？」

「僕もそう簡単に破るような作りにはしていない」

『そうだよ。この天才束さんでも解析に三年も使つたんだからテイエリゝの技術力は凄いよね』

そんな気の抜けた声がPCのスピーカーから流れる。見るとディスプレイに新しいウィンドウが映し出されていた。そこには満面の笑みで映し出されているタバネがいた。

『久しぶりだね、ちいちゃん。テイエリゝは電話するから久しぶりじゃないけど』

「確かに久しぶりだな、束。それで？どうやってこの学園のPCに潜入したんだ？」

『むふふ、この束さんの前ではどんなプロテクトだって突破可能なんだよ』

「ふむ、ではこのTV通信は削除してもいいのかな？」

「わぁ〜!!!!!!待って、待って!!!!!!ティエリ〜、ストップ
〜!!!!!!それだけは駄目〜!!!!!!」

僕の言葉に画面の向こうで慌て始める彼女は勢い余って後ろに倒れてしまう。その際、ディスプレイに幾つか見てはいけない物が見えた。それを見たチフユがため息を吐く。

「束。脱ぎ捨てた物は一纏めにして洗っておけ」

「わ〜お。日常生活がいくくに頼りきりのちいちゃんに言われち
った」

「何の用だ。とは今更だから言わないが、一つ聞く。どうやって僕
が作ったプロテクトを解除した？あれはパスワード十二桁を三十秒
毎にランダムで切り替えるため、僕でも解除には時間が掛かるのだ
が？」

「それは乙女の勘と愛の力だね〜」

真面目に聞いた僕が馬鹿だった。

「それで、どうだった？驚いた？やっぱり束さんは凄いよね？」

まるで初めて問題が解けた子供のように無邪気に尋ねてくる束に
呆れてしまう。

「そうだな。元々、僕のいた世界の機動兵器は数十メートルの大き
さだ。それを等身大まで縮小し、無人機化、更には少ない資料と機

材、そしてこの短期間での擬似太陽炉の製造。実戦段階までの調整。挙げればキリが無い。全く、君は本当に凄い」

『いや、それほどでもあるかな』

素直に褒めると、タバネは頬を赤く染め、後頭部を掻きながら照れる。

『でも、ティエリは凄いね。あんな隠し玉があるなんて』

「トランザムの事か？あれは保険のような物だ」

「スペックを一時的に三倍に引き上げるのが保険か？」

呆れ気味のチフユの声は無視する。

『でも、そのシステムも束さんは解析してしまったのでした。今は実験中でも苦労しているんだよ』

「だろうな。擬似太陽炉は元々トランザムに対応できるよう造られてはいない」

もつとも、彼女なら近いうちに完成させてしまいそうであるが。

『だよ。じゃあ、根本から色々弄んなきゃ駄目だな』

そういつて、自分の世界に入るタバネ。ため息を吐いて通信を切ろうとマウスを動かす。

『ねえ、ティエリ？』

「なんだ？」

『東さんと一緒に造ったオリジナルの太陽炉は確か五基だよね？』

「ああ、そうだ」

『四基は東さんもどれに使ったかは分かるけど、後一基はどの機体に付けたの？』

「それは教えられないな」

『なんで？』

そう聞いてくるタバネに僕は笑って。

「さあ、何故かな？」

『むゝ、ティエリゝは意地悪だね。まあ、その方が色々と楽しみが増えるからいつか。それじゃ二人ともまたねゝ』

そういうと、通信が切れる。ため息を吐く。

「アイツのお気に入りは大変だな」

「それは君も同じだろう？」

楽しそうに呟くチフユに答える。

「それで？東が言っていた残りの太陽炉は何処にある？」

真剣な表情。僕は笑みを浮かべ。

「安心してくれ。僕は彼女と違って世界と喧嘩をするような事はないさ。残りの太陽炉はまだ僕の手元だ」

それに『彼』もまだ本調子ではないからな。

第10話「休日」（後書き）

どうも、作者です。今回はティエリアの回想と束との会話でした。この作品のティエリアはELSとの対話が終わった後のティエリアという事になっています。次回はシャルとラウラの登場。でも、他クラスの為、十夏とは接触しにくいかも。では次回の更新をお楽しみに

第11話「転校生二人」

桃色の粒子がビームとなり、すぐ横を通り過ぎる。避けられる速度だが、威力が高い為、もし当たったら、という事を想像して冷や汗が出る。しかも、相手はそれを正確に撃ち込んで来ている。

「そこおおっ！！！！！！」

ビームを避け、『イグニッション・ブースト瞬時加速』で懐に入る。次いで、持っている『双天牙月』を振るう。だが、それは若草色のバリアに阻まれる。そして相手が持っているバズーカが私の目の前に移動する。

「ッ！？」

回避した瞬間、私がいた所にビームが通り抜けていった。距離を取り、『フルスキン全身装甲』の相手を睨む。

「その防御力と攻撃力、反則じゃない？」

喋りながら呼吸を整える。

『まあ、元々多対一の殲滅戦がヴァーチェの役割だからこれも妥当だと思うよ？』

やや呆れながら答えが返ってくる。相手、十夏も驚いているようだ。

「役割？もしかしてヴァーチェって複数の機体と連携して戦うよう作られてるの？」

『うゝん、一応ね。といっても別に連携取らなくても問題は無いしね』

「ふゝん」

そういつて、肩の『龍砲』を放つ。不意打ち気味で撃ったのだが、防がれてしまう。けど、それは予測範囲内。

『そこ』

呟きと共にビームが放たれる。それを避けながら『龍砲』を放つ。今度はバリアではなく、ヴァーチエに当たる。どうやらバリアの展開と攻撃は同時に行えないようだ。

「なら！...！」

立て続けに『龍砲』を連射。同時にヴァーチエを地面に誘導させる。

『甘いよ』

言葉と共にビームが飛んで来るが狙いが甘いのか、さつきより避けやすい。

「行けッ！...！！！」

叫びと共に『龍砲』をヴァーチエ周囲の地面に放ち、土煙を巻き上げる。即席の煙幕だが、これで十分。

「貰った！！！！！！」

ヴァーチェの背後。『双天牙月』を振るう。捉えた、そう感じた瞬間。

『トランザム』

十夏が呟いた瞬間、ヴァーチェの装甲が赤く輝いた。そして先程の機動を上回る動きで私の攻撃を回避し、足に内蔵してあったビームサーベルを私の首筋に突きつける。

『私の勝ちかな？』

「ねえ、そろそろ機嫌直してよ」

「やっぱ、ずるいわよ。あのシステム。何よ、一定時間スペックを三倍に引き上げるとか。私にも超越しなさいよ！！！！！！」

「無茶言わないでよ」

そういつて、ため息を吐く。先日の模擬戦で勝って以降、ずっと不機嫌なのだ。どうやら土壇場で『TRANS-AM』を使ったのが原因らしい。普通に勝ってたらこれほど不機嫌になる事も無かったのかな。

「ん？」

そんな事を考えていると視線を感じる。視線の方を見ると廊下を行きかう生徒たちの中にその子はいた。

「……………」

無言、けれどその表情は僅かな驚きと関心が表れていた。銀髪の長い髪、赤い目。左目を隠す特異な眼帯。そして鈴ちゃんと良いところ勝負の身長。

「どうしたの？十夏」

「え？う、ううん。なんでもない」

鈴ちゃんの言葉に我に帰る。そして視線をもう一度その子に向けるが、その子は何処にも居なかった。

「ま、いいか。そういえば、一組に転校生が来たってさっき言ってたよね？」

「そうよ。で、その内の一人が男らしいの。まあ、そっちはどうでもいいんだけど。問題はもう一人よ」

「どんな子？」

聞くと、鈴ちゃんは懷のポケットからメモ帳を取り出し、ページを捲る。こういう情報をメモって置くのは凄いな。

「ドイツの代表候補生で名前はラウラ・ボーデヴィツヒ。こつちに来る前はIS部隊の隊長をやってたって話よ。それと自己紹介でいきなり一夏をぶった」

「ふん、ってお兄ちゃんを!？」

私の言葉に鈴ちゃんが頷く。同時に屋上に着く。

「でも、ドイツか。あれ？確か『あの後』お姉ちゃんが向かった場所って」

そう考えながら、歩くとお兄ちゃん、篤さん、セシリアさんが仲良く(?)集まってお昼を食べていた。そしてそこには見慣れない人が居た。

「おお、十夏と鈴も来たか」

お兄ちゃんが嬉しそうに私たちのほうに手を振る。

「ねえ、お兄ちゃん。この人は？」

私はセシリアさんの隣に座って、お兄ちゃんに聞く。

「ああ、今日転校して来たんだ。シャルル、俺の妹の十夏だ」

「シャルル・デュノアです。宜しく」

「そこにいる愚兄の妹で織斑十夏です」

そういつて、笑いながら手を握る。はて、この人は男だと言う。

だとすれば世界で二人目のIS操縦者だ。メディアが騒ぐのは普通なのだが。

「えっと、シャルルさんって男だよね？」

「そうだけど、どうかした？」

「いや、その割りにメディアが騒がないって」

私の言葉にシャルルさんの笑みが固まる。

「ん？そんなに気になるのか？」

お兄ちゃんの言葉に頷く。確かにお兄ちゃんの場合は『ブリュンヒルデの弟』という事も有名になった一員ではある。けど、それを差し引いても世界で二人目だ。珍しさは薄くなるものの珍しいのに変わりない。私は持ってきた鞆の中からハ口を取り出す。

『トオカ！！ゲンキカ！！』

「うん、元気だよ。ちよつと御免ね」

そういつて、ハ口の後頭部に端末を取り付ける。そして操作していると鈴ちゃんとシャルルさん、お兄ちゃんが驚いている。

「そういえば、ハ口を見るのが初めてだっけ？」

「それ、何？なんか、可愛いけど」

鈴ちゃんの言葉にハ口が目もぺかぺかと光らせる。

「これはハロ。主に私の『ヴァーチェ』の整備や微調整を手伝ってくれる優れものだよ。搭載されているAIも賢いから落ち込んだときとか励ましてくれるんだ」

『ヨロシク!!ヨロシク!!』

皆がハロで和んでいるときに私はハロを使ってネットにアクセスしていた。

「うゝん、どこかで情報統制でもしているのかな。世界で二人目の男性操縦者なんて記事。見当たらないな」

「別にいいんじゃないか?」

「良くない!!!!!!」

お兄ちゃんの能天気な言葉に思わず叫んでしまう。ギョツとした皆を見て私は咳払いをして。

「いい?お兄ちゃん是世界で一人しかいない男性操縦者。それは科学者に言えばまたとない『研究素材』なんだよ?」

「研究素材って俺はモルモットかよ」

「まあ、モルモットよりかは希少な存在だから待遇はいいかもね。でもこの学園に転入してなかったらお兄ちゃんは今頃どこかの研究室で研究されていたかもしれないんだよ?」

私の言葉に嫌な想像でもしたのか、お兄ちゃんが険しい顔をする。

「それに今の女尊卑男の世の中じゃ、お兄ちゃん存在は一部の人にはとても邪魔な人なの」

「一部の人間って？」

そこまで説明しなくちゃいけないのか、この愚兄は。

「今の世の中は女性が有利。それはISの恩恵なのは分かるよね？けど、お兄ちゃんの出現でそれが揺らいだ。もし、お兄ちゃんみたいにISを使える男の人が増えたら？それを危険視してお兄ちゃんやシャルルさんを狙う人間だっているんだよ？それにお兄ちゃんの『白式・七剣』だってまだ秘密があるんだよ。特にGNドライブなんかそうだし」

「あの動力源がどうかしたのか？」

「まったく、この兄貴はあれがどれだけ凄い物が気付いてないのか？私はため息を吐いて周りの皆を見る。」

「これは最重要機密だから絶対に口外しないでね？GNドライブは量産も不可能に近いオーバーテクノロジーで出来てるの。そんなテクノロジーが詰まったISの技術。欲しい場所なんて腐る程あるんだよ？お兄ちゃんは自分の存在がどれだけ規格外か少しは自覚して」

「お、おう」

一気に捲くし立て、息を吐く。

「はは。大変だね、一夏」

シャルルさんがお兄ちゃんに苦笑しながら声を掛ける。それを見ながら自分の弁当を広げる。

「確かに十夏さんの言い分も分かりますわ。だとすれば、あの憎たらしいドイツ代表はもしかすれば」

「セシリアさん。それは無いよ。ドイツの転校生は白だと思う。お兄ちゃんを引つ叩いたのは別の理由」

「別の理由？」

篤さんが聞いてくる。私は頷いて。

「お兄ちゃん、あの『事件』は覚えてる？」

「ああ」

お兄ちゃんが苦々しい顔で頷く。

「あの事件？」

「第二回モンド・グロッソでの決勝戦。お姉ちゃんが棄権した理由」

お兄ちゃんが誘拐されたあの事件。

「確か、一夏さんが誘拐されたんでしたっけ？」

「うん。それでお兄ちゃんの間所を見つけたのがドイツ。んで、そのドイツに借りがあるお姉ちゃんはドイツで教官をする事になった

の。多分、転校生のラウラって子はお姉ちゃんの教え子でしょ？」

「ちょっと待て、十夏。俺は千冬姉がドイツの所にいたのだったつ
い最近まで知らなかったぞ。なんでお前、そんな事知ってるんだ？」

「え？なんでって。本人に聞いたんだけど」

「ほ、本人！？」

といつても、ティエリアさん経由だけだね。

「でも、だとしたら何で一夏を殴る理由になるの？」

「想像していた一夏さんより現実の一夏さんが腑抜けだからでは？」

セシリアさん。地味に酷いな。私は少しだけ唸って。何となく推測を浮かべる。

「多分、ラウラさんはお姉ちゃんに心酔してるんじゃないかな？そのお姉ちゃんが優勝間違いないと言われた大会で優勝できなかった原因を疎ましく思ってる、とか」

そういつて、お兄ちゃんに箸を向ける。

「ちょっと、それ逆恨みもいい所じゃないの！？」

「というか、逆恨みにもなっていないだろう！！！！！！」

「なんですか、その理不尽の塊は！！！！！！！！」

私の推測で勝手に盛り上がるのはいいんだけど、私に詰め寄るのはお門違いだよ。

「三人とも、今のは十夏の推測だよ。それが本当とは限らないだろ？」

シャルルさんが私を庇ってくれる。

「まあ、気を付けた方がいいかもね。変な因縁付けられて刺されたんじゃ、嫌でしょ？まあ、女性の嫉妬で刺されたんじゃ文句言えないけど」

「うおい！！！！なんで女の嫉妬で刺されなきゃ、いけないんだよ！！！！！」

そういつて、お兄ちゃんが私に詰め寄ってくる。私は食べ終わってた弁当を片付けながら。

「それくらい、自分で気付きなさいよ。朴念仁」

そういつて、私は屋上から出る。

「ドイツ代表候補生。ラウラ・ボーデヴィツヒ、君がドイツの教官時代に教えていた子だったか？」

「それがどうした？」

そう返しながら彼女はコーヒーを受け取る。

「いいのか？初日から問題を起こしたぞ？お陰で、何処で嗅ぎ付けたのか束からメールが来ている」

そういつて、PCを操作して彼女のメールを見せる。彼女はそれを一秒見た瞬間、目を離す。

「削除しろ」

「したさ。けど、削除した途端、新しいメールが来るんだ」

そういつて、ため息を吐く。

「これはあいつ等個人の問題だ。部外者の私たちが口を出していい問題ではない」

「確かにそうだな。けど、原因の発端は君だろう？いや、もっと掘り進めば原因は彼か」

言った瞬間、彼女の視線が鋭くなる。するとディスプレイで作業していたプログラムが終わったようだ。

「何を作っている？」

「つい先日、トオカにヴァーチェの物理攻撃武装を頼まれたんだ。それが完成したところだ」

そういつて、新しくウィンドウを開く。そこには灰色の重装甲。巨大なバズーカ砲、腰には携行型ロケットランチャー。肩には巨大な砲塔を担いだヴァーチェが映し出された。

「これが物理攻撃に特化した『ガンダムヴァーチェ フィジカル』ビーム兵器を肩のGNキャノンのみに限定し、残りの武装を総て実弾で統一し、GNフィールドの展開範囲、展開時間の延長を図ったパッケージだ」

「成る程な。これなら『白式・七剣』相手も不利にはならんだろう。それとコレだけではないのだろう?」

「全く、君は鋭いな」

苦笑し、新しいウィンドウを開く。そこには追加装甲を装備した『白式』が映し出されていた。

「これは?」

「高機動奇襲型パッケージ。通称『アヴァランチ』攻撃力はそのままだに速度を上げたパッケージだ」

「ふむ」

すると、なにやら考え始めるチフユ。

「ティエリア。これの完成は?」

「ヴァーチェの方は既に出てくる。後は実戦データを集めるだけ」

だ。『アヴァランチ』の方はもう少し掛かるが、臨海学校までには間に合うだろう」

そういうと、チフユは暫く考え、フツと笑みを作る。ああ、何か変な事を考えたな。まあ、この手の笑顔は僕に無害な物が多いので問題は無いだろう。

「その追加パック。早々にデータが取れそうだ」

「という事は今度のイベントか」

僕の言葉にチフユが頷くと、部屋から出て行く。僕はそれを見送った後、コーヒを一口飲む。すると、携帯が鳴った。

「また彼女か？」

うんざりしながら液晶を見るとトオカだった。

「どうかしたのか？」

『あ、えっと。ちょっと頼んでもいいですか？』

「まあ、こちらも仕事が一段落したからな。問題は無いが」

そういうと、電話の向こうが黙る。

『えっとフランスのデュノア社を調べてくれますか？出来れば此処最近の会社状況とか』

その言葉に少し考える。多分、転校生関係だろう。

「分かった。だが、僕も忙しい。少々遅れるかもしれないが、構わないか？」

『はい。ありがとうございます』

そういつて、電話を切る。さて、デュノア社だったか。

第12話「昔の話」

「いいか、兄ちゃんが鬼やるから隠れるんだぞ？」

「うん！ー！」

その日、私とお兄ちゃんは何時ものように公園で遊んでいた。物心つく頃には両親なんていなかったけど、私は幸福だったと思う。厳しいけど強くて優しいお姉ちゃん。ちよつと頼りないけど何時も私を守ってくれたお兄ちゃん。そんな家族三人で私たちは日々を楽しく過ごしていた。その日も何時ものようにお姉ちゃんは出掛けていて私とお兄ちゃんは近くの公園で遊んでいた。

「此処でいいかな」

そういつて、私はお兄ちゃんから隠れる。今日も昨日と同じ、日が暮れるまで遊んで、家に帰ってお兄ちゃんと夕飯作って、食べて、寝て、また明日がやってくる。

「？」

その筈だった。

「起きろ。馬鹿者」

言葉と同時にスパーン、という音と頭頂部の痛みで眠気が吹き飛んだ。

「うう、これで馬鹿になったら恨んでやる!!」

ズビシ、と目の前の、出席簿を肩に乗せている美人、お姉ちゃんを指差す。同時にもう一度頭頂部に痛みが走る。

「授業に寝ていたお前が悪い。自業自得だ」

まったくもってその通りです。そしてお姉ちゃんは教卓に戻る前に私の隣で豪快にいびきを掻いている速華さんの頭を叩く。

「んあつ?!なに!?!お昼?!」

そういつて、口から垂れている涎を拭こうとしないで周りを見回す。その姿にお姉ちゃんがため息を漏らす。うわ、頬が引き攣っているよ。

「私の授業中に寝るとはいいい度胸だな?柿崎、織斑。お前たちには黒板の問題を解いてもらう。制限時間は三分だ」

その後、二分半で問題を解いた私と結局問題を解けなくて課題を渡された速華さんでした。

「ううゝ、今日は厄日だゝ!!!」

食堂で速華さんが叫ぶ。それを聞きながら私は焼肉定食を頼張る。

「厄日って、授業中に居眠りするアンタが悪いんでしょうが」

呆れながら、隣にいる光さんが箸で速華さんを指し示す。因みに光さんは、ざる蕎麦で速華さんはステーキだ。

「だからってこの課題は無いでしょ、普通!!」

そういつて、取り出したのは数枚のプリント。そこには数式がズラリと並んでいた。

「まあ、まあ。私も手伝うから」

「こら、十夏。それは速華の為にならないでしょ？自分でやらなきゃ、駄目なの」

そういつて、指を立てる光さんを速華さんが睨みつける。

「まあ、本人がどうしても駄目ってんなら手伝ってあげるけど」

そういつと、速華さんは笑って光さんに抱きつく。

「やっぱ持つべき物は友達だゝ!!!」

「ち、ちよつと速華！！離れなさいよ。お昼食べれないでしょ！！」

そんな二人を見ながら自分のお昼を食べ終える。

「それじゃ、私はアリーナに行ってるから」

そういつて、食堂を出る。すると、携帯が鳴った。見ると、ティエリアさんからメールが来ていた。

「何だろ？」

見てみると、先日頼んだデュノア社に関する情報だった。

「急ぎのようじゃなかったんだけどな」

これは後で何か甘い物でも作ってあげよう。うん、そうしよう。そしてメール内容はやはり、というか悪い予感が当たっていた。

「これは少し警戒を強めたほうがいいかも」

下手すれば『また』お兄ちゃんが危険な目に遭うかもしれない。そう思うと背筋に悪寒が走る。

「そんなの駄目！！」

そうだ。あんな思いは一度で十分。二度目なんて持ったの外だ。私は悪寒を振り払うように走り出す。

「今度は私が守る番」

そう、今の私はあの時、震えて隠れることしか出来なかった弱い人間じゃない。そう、自分に言い聞かせ、アリーナに向かう。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

アリーナに付くとそんな不機嫌そうな声が聞こえた。見ると黒いISの少女が飛翔しながらお兄ちゃんを睨んでいる。私はオープンチャンネルを開く。

「なんかいきなり修羅場だけど、どうしたの？」

『十夏か。いや、俺もよく分かんない』

そんな困ったような口調でお兄ちゃんが返してきた。取り敢えず、私は黒のISに向かって。

「えっと、言つて置くけど。お兄ちゃんは突撃しか考えてない猪さんだから戦っても勝負にならないよ？それとも、弱い者苛めして悦に入る下衆な趣味の持ち主ですか？」

『うおい！？確かに俺は弱いけど、その言い方は無いよな！！』

お兄ちゃんからの意見は無視する。すると黒いISの少女は私の

ほうに視線を向ける。

『お前は確か、教官の妹だったか？まあ、お前でもいいか。私と勝負しろ』

「私としては色んなISとの戦闘データが取れるから大歓迎だけど。ちゃんとアリーナに許可は取ってね？そうしないと周りの人に迷惑だから」

『それくらいは分かっているさ』

そういうと、少女はアリーナの責任者に模擬戦の許可を取っている。私はその間にお兄ちゃんたちの方に向かう。

「おい、十夏！！あんな奴と戦うことなんて無いぞ！！」

「そうよ！！アイツ単に自分が強いって誇示したいだけじゃないの」

「そうだろうね。でもさ、私もちよつと頭に来る所があるから」

そういつて、笑い。ヴァーチエを起動する。

『まあ、見ててよ。何時までもお兄ちゃんに守られるような私じゃないから』

そういつて、飛翔する。

「取り敢えず、学年別トーナメントも控えているし、程々にしようね」

『別にそう心配することも無いだろう』

そういつて、笑みを作る少女。彼女が動いた瞬間、私は右に素早く移動する。同時に私がいた所に銃弾が轟音と共に通り過ぎる。

『機体が大破すればトーナメントの事も気にせずにすむ』

その言葉と共に左肩に備え付けられた巨大な実弾砲から次々と銃弾が解き放たれる。それを私は最小限の動きで避ける。

『フツ、流石は教官の妹だ。良い動きをする』

「お姉ちゃんを引き合いに出すのは止めてくれないかな。それと私は織斑十夏という名前があるの。悪いけど、お姉ちゃんやお兄ちゃんの類似品みたいな扱いは止めてくれる？」

そういつて、肩のGNキャノンを発射する。それを避ける少女の回避コースにGNバズーカを放つもギリギリで避けられる。

『火力が高いな。それにその機動性で良く動く。中々やるじゃないか』

「それはどうも」

そういつて、威力を抑えたGNキャノンを撃ち接近する。

『成る程な』

私と少女は互いに向き合い、お互いの武器を構えた状態で静止する。動きを止めた理由は相手の少女から戦意が消えたことだ。その

少女は驚きと感心の笑みを浮かべていた。そして彼女はゆっくりと肩の実弾砲を待機状態に移行する。

『気が変わった。織斑十夏、お前はトーナメントで倒すことにする』

「それは有難いな。変に傷つけて整備に時間掛けるのも嫌だし」

正直、このまま続けても勝機は薄いだろう。相手は動きを見るからに一流。更に奥の手を隠している。まあ、奥の手を隠しているのは私もなんだけど、それでもその奥の手は最終手段であり秘匿すべき物だ。早々に見せるものではない。

「トーナメント。楽しみにしていた方がいいかな？」

『ああ、楽しみにしているといい』

そういつて、少女はISを解除してアリーナゲートに向かっていく。私もヴァーチエを解除して身体を軽く伸ばす。こんなに緊張したのは久しぶりだ。

「十夏！！」

お兄ちゃんが駆け寄ってくる。

「大丈夫か？怪我とか無いか？」

そういつて、私の身体を見る。それに呆れながら。

「大丈夫だよ。もう、お兄ちゃんは過保護過ぎ」

もう少しその気遣いを他人に分けてやればいいのに。

「それにしても、惜しかったな。もう少し早ければお前の勝ちだったのに」

そういつて、笑うお兄ちゃんにため息が出る。

「それ、本気で言ってる？あの子、まだ何か隠してたよ？」

「え？そうなのか！？」

そういつて、驚く。そして後ろに控えている皆に視線を向けると。

「うむ、あのラウラという少女は確かに何か隠していたな」

「どんな代物かは分かりませんがね。まあ、厄介な物でしょうね」

「アイツも十夏の実力を測りたかったみたいだし。余裕そうな態度が癪だけど」

「でも凄いね、十夏は。あの砲撃をあの手動性で避けきるなんて」

最後のシャルさんだけ私の操縦を褒めてくれた。

「そうかな？まあ、ティエリアさんが組んでくれたシュミレータの経験があるから、それのお陰かも」

「シュミレータ？」

頷く。以前、暇つぶしにとティエリアさんが組み立てたIS用の

実戦シミュレータだ。大きさは個室トイレの大体3倍位。中にある端末に待機状態のISを接続してバーチャル空間でのシミュレーションだ。

「シミュレートも色々あつてね。地上、空中、砂漠、何処かの軍事基地、海上、水中、果ては宇宙空間まで何でもあり」

しかも、内容は決まって五機以上の編隊を組んだMS戦。中には戦艦や空母などもあり、殆ど多対一の戦闘を強いられる。勿論、他のシミュレータを通して複数の人間と連携も出来るが、いかんせん戦力差がありすぎる。そして内容の殆どが人型兵器との戦いだった。

「結構、驚くことも多いけどしっかり作られてるし、いいトレーニングにもなるよ」

此処までの難易度を作るのに苦労したのでは？と本人に聞くとテイエリアさんは苦笑して。

「苦労、といつても。僕が経験したミッションをそのまま、インプットしているだけだが？」

そういつてきた。その時、啞然とした自分を思い出し、恥ずかしくなる。そしてそれ以上にテイエリアさんの戦闘経験に驚かされる。

「今度皆もやってみたら？」

といつても、人数分作り終えてないだろうけど。

真つ暗な闇の中を駆ける。レーダーを見れば、もう少して目標を見つけられる筈だ。すると、視線の先に目的の物が現れた。

「アレ……………か」

それは青を基調とした装甲に身を包んだ人型の兵器だった。両肩から戦闘機のような装置が背中まで装備されている機体で若草色の粒子が両肩から溢れ出ている。私はそれを見た瞬間『瞬間加速^{イクニツシヨウ}』で接近。右手に持っているブレードを振るも相手の右手に装備されている物に阻まれる。それは一見小さな盾に見えた。だが、その盾にはブレードが取り付けられていた。相手は私の剣を軽々と弾くと距離を取り、そして盾に備え付けられているビーム兵器で攻撃してくる。

「チツ!!」

軽く舌打ちし、回避に専念する。反撃は考えていない。否、反撃する機会が無いのだ。まるで私が回避する場所を先読みしているかのようにビーム兵器が飛んでくるのだ。避けるので精一杯だ。

「だが、甘い!!」

叫びと共に駆け、斬り付ける。相手もライフル形態からソード形態に変更して私に合わせる。まるで接近戦の方が得意と言わんばかりに。気付けば自然と笑みを浮かべていた。

「ハアッ！！！」

裂帛の気合と共に繰り出される一撃を相手は難なく受け、反撃してくる。それを受け流し、又は避けながら反撃する。

「くうっ！？」

重い一撃を受け、後ろに下がり背後にあつた三メートルほどの岩を足場に相手の真上から攻撃を仕掛ける。だが、そんな奇抜な攻撃にも相手は対処してきた。

「まだ、まだ！！！！！」

言葉と共に加速する。そのまま、相手と共に高機動の接近戦を行う。岩以外何も無い真つ暗な空間に若草色の光が跳ねるように交差し、交差する度にオレンジ色の光が飛び散る。

「くうっ！！！」

何度目か分からない剣戟を重ね、体勢が僅かに崩れる。そこに相手が追撃を仕掛ける。

「やはりな！！！」

笑みを浮かべ、加速。私は半円を描くように相手の後ろに跳び、そこにあつた岩を足場にして相手の背後に向き直る。

「悪いが此処は！！私の距離だ！！！！！！！」

叫びと共にブレードを突き出す。見れば相手の装甲が赤く輝いて

いたが、この距離ではどうすることも出来ない。ブレードはそのまま吸い込まれるように相手に突き刺さる。

「なんだ？」

ブレードは根元まで突き刺さった。そう『なんの抵抗もなく』突き刺さったのだ。刺した感触さえ無い。疑問に思ったのも一瞬、答えは驚きと共に現れた。

「なん……………だと?!」

目の前、ブレードに突き刺された機体が細かい粒子となって消える。そしてISのアラームが鳴る。警告先は背後。

「っ!？」

背後を見ると、今正に長大なブレードを振り被っている相手が見えた。そして腹部に衝撃が走り、周りが完全な闇に変わった。

「……………」

一度、深呼吸して気持ちを落ち着かせシミュレータを出す。だが、足元がふらつく。

「大丈夫か？」

声と共に身体を誰かに抱き抱えられる。視線を上げるとそこにはティエリアが立っていた。

「ああ、もう大丈夫だ」

そういつて、近くの椅子に腰掛け背を預ける。ふと、時計を見る。時刻は五時。確か仕事が完全に片付いたのが三時でその後、ティエリアを訪ねたのが三時半。という事は一時間半もシミュレーターでトレーニングをしていた事になる。集中し過ぎで体力をかなり使っていたらしい。

「ティエリア。アレはなんだ？」

が、今は時間や体力など気にならない。気になるのは先程の戦い。最後の一手、相手のIS（この場合はMSと呼ぶべきか）が粒子となって消えたのだ。

「アレは『量子化』一定空間内に一定量以上のGN粒子がある場合のみ、発動する。あの機体とパイロットのみに許された能力だ」

それを聞き、最初に思ったのは呆れ。

「馬鹿げているな。何故、量子レベルに分解、再構築された人間が生きている」

「それは僕も疑問だ。だが、僕はアレを確立事象の一種だと捉えている」

確立事象？聞き慣れない言葉にティエリアを見る。ティエリアは一度「推測だが」と前置きを置いて。

「アレはGN粒子を介して『攻撃を受けた場所』の自身を非実在にし『攻撃を受けなかった所』に移し変えるものだろう」

「そんな事可能なのか？」

ティエリアの言っている事はイマイチ解らない。だが、それは簡単に出来るものなのか？

「勿論、簡単に出来る代物ではない。あれが出来たのは例外中の例外。先ず、機体である『OOライザー』の『ツインドライヴシステム』による高濃度のGN粒子化にあった事。そしてその『ツインドライヴ』を装備したOOライザーのランザムによる恩恵。そしてイノベーター、純粹種として覚醒した刹那・F・セイエイの能力があつたからこそだ」

「ではその条件なら十夏も可能なのか？」

私の質問にティエリアは首を振る。

「一口にイノベーターといっても本質は人間と同じ。それぞれ得手不得手がある。トオカでは例え刹那よりも好条件の状況でも『量子化』は不可能だろう。『量子化』が可能なのは刹那一人だろう」

言われ、息を吐く。全く、ティエリアの世界の人間は桁外れだな。あの緑の機体の精密射撃といい、オレンジ色の変形機体の機動性といい。

「まあ、昔のデータ。それも純粹種に覚醒した初期の刹那のプログラムに過去の『暮桜』のデータで挑んでこの結果だ。もし君が僕たちの世界で敵だったらと思うとゾツとする」

そういつて、ティエリアは私に小型端末を渡す。そこには先程まで行っていたシミュレーターの成績が載っていた。

「全く『対ガンダム戦』それも一対一とはいえ、ガンダムに勝てる人間はそうそういないといのに」

「対ガンダムやオーバーフラッグスの相手は流石に苦戦したぞ？」

「苦戦で済む君が可笑しいな。それでどうだい？データ上とはいえ〇〇ライザーと戦った感想は？」

聞かれ、私は笑みを作る。

「決まっている。接近戦で負けたのだ。悔しいに決まっている」

そういつて、立ち上がる。

「時間は大丈夫か？」

「なに、もう一戦だけだ」

私の言葉にティエリアが笑みを浮かべる。

「全く、負けず嫌いな所は変わっていないな」

そういつて、システムを立ち上げる。私はシミュレータの中に入る。

『先程の戦闘で『暮桜』を現在の君に調整した。先程より戦いやすいだろう』

その言葉と共に私の視界が変わり、見渡す限りの青に変わった。

どうやら今度は海上での戦闘らしい。ふと、視界の先では〇〇ライザーが悠然と浮遊していた。私は笑みを浮かべ。

「さあ、リベンジと行こうか!!!」

加速し、一気に距離を詰める。

第12話「昔の話」（後書き）

どうも作者です。今回はラウラと十夏の模擬戦と〇〇ライザーと千冬さんとのガチバトルでした。そして量子化についての説明は作者のアドリブです。そして〇〇ライザーに惨敗する千冬さん。流石に量子化できる〇〇ライザーに勝つのは無理だろう。という事でこんな感じです。それでは次回もご期待ください

第13話「タッグパートナー」

「ええええええっ?!」

廊下に叫びが木霊する。私は耳を指で塞いで至近距離の叫びを防ぎながらため息を吐く。

「因みに拒否権は無いぞ?これは決定事項だ」

「だからって、何で私がラウラさんと組まないといけないの?そんなのお兄ちゃんに丸投げすればいいじゃん!!!!」

「一夏では余計に駄目だろうが!!」

声を上げ、つい出席簿で殴ってしまう。十夏は殴られた箇所を摩りながら。

「それなら私だって同じじゃん。ていうか、なんで私が組まないといけないの?」

「まあ、言ってしまえば消去法だ。ラウラ自身、此処の生徒とはまだ会って間もない。そんな状況でこの行事だ。タッグを組む以前の問題だろう。それにラウラは専用機持ちだ。汎用機の人間とタッグを組ませては意味が無いだろう?」

「まあ、確かにそうだけど。なんで私なの?」

「先ずアイツとタッグを組めるほどの人間をピックアップした。だが」

「もしかしてそれって鈴ちゃんとセシリアさん？」

頷く。

「まあ、第一印象最悪の人間と組め、なんて無理だよな」

「そういう事だ。諦めろ」

そういうと、十夏は諦めたように返事する。

「んじゃ、私はこの事をラウラさんに伝えてくるから」

「済まん。何時もお前には損な役回りを任してしまう」

そういうと、十夏が笑う。

「大丈夫だよ。もう慣れっこだし、家族だもん、代わりに思いっきり我儘聞いてもらうからね？」

その言葉を聞いて、思わず笑ってしまう。

「分かった。その時はなんでも言う事を聞いてやる」

「おっし。言質取ったからね！！んじゃ、失礼します。千冬先生」

そういうと、十夏は一組の教室に向かった。

「良かったのか？」

「盗み聞きとは、何時の間にか趣味が悪くなったな。ティエリア」
背後からの声に視線は向けず、柱に背を預けて告げる。

「僕は通りかかっただけで別に会話の総てを聞いているわけではないさ。それで本当に良かったのか？」

「愚問だ。十夏の性格は私が一番良く知っている」

「僕が聞いているのは先程起きたアリーナでの一件だ。その時のことを教えなくていいのか？」と聞いているんだ」

「……………待て」

私は視線だけティエリアに向け。

「教えていなかったのか？」

「当たり前だ。その時、彼女はシミュレーターで訓練していたし。それに僕も付き合っていた。どうやってそれを知る事が出来る？」

思わず、ため息を吐いて額に手を当てる。

「後で教える」

「その方がいいな。それと」

そういつて、ティエリアがUSBメモリを取り出す。

「先程、山田先生から預かっておいた。今日中に仕上げて欲しいそ

うだ」

そういつて、私にしっかりと手渡す。

「ティエリア。わざとやっていないか？」

「僕は至って真面目だが？」

そういつて、背中を向けるティエリアの肩をがっしり掴む。

「手伝え！！」

「断る。僕にも色々と仕事がある。ソレは君の」

「ええい！！ツベコベ言わず、手伝え！！！！そうだ、直接手渡さなかつた山田先生も手伝ってもらおう。うん、その方が良く！！！！」

「待て、チフユ。落ち着け」

「何を言っている。私は落ち着いているぞ？おお、山田先生。そこにいたか！！！！」

「ひいつ？！」

何をそんなに怯えているんだ？まあいい、今は時間が惜しい。

「私がお前とタッグを組む、だと？」

「うん、そうらしいね。因みにお姉ちゃんが進言したみたい」

「教官が？……………そうか、なら私に異論は無い」

そう言われ、ホツとする。そして私は制服のポケットから小型の端末を取り出す。

「はい、ヴァーチェのデータ」

「……………」

無言で端末を受け取り、データを見るラウラさん。暫く、端末を操作する音が教室に響く。

「成る程、中々の機体だな。それで？こっちの『フィジカル』という武装は？」

「あ、こっち？こっちは物理兵装に切り替えたバージョン。主に攻撃力そのままにエネルギー効率に重点を置いた兵装だね」

「ふむ、当日はどっちのパッケージを使うんだ？」

「フィジカルの方だね。実戦テストも兼ねるみたいだから」

そついうと、ラウラさんが顔を顰める。

「それは構わんが、実戦で初めての武装を使うのは得策ではないな」

まあ、正論だよな。

「それは分かってるよ。取り敢えず、当日までの間はフィジカルに慣れるよう訓練するつもり」

「だが、場所はどうする？そう都合よくアリーナが空くとは思えんが」

「ああ、それなら大丈夫」

私が胸を張って答える。

「シミュレーターがあるから」

教官の妹に連れてこられた場所はISの無数にある整備室の一つだった。

「ティエリアさん？あれ、いないみたい。まあ、大丈夫だよな」

そういつて、教官の妹は部屋に入ると、手招きする。どうやら入っていいようだ。

「ほう、研究室も兼ねているのか」

「うん、私には分からないものも幾つかあるから勝手に触らないけど」

そういつて、部屋の中心。三メートル位の黒い塊が二つ置いてあった。それに触れようとした瞬間、視界の隅で何かが動いた。

「っ!？」

反射的に懐のナイフを掴み、振り返る。そこにあつたのは。

『ゲンキカ!!ゲンキカ!!』

「な……………んだ、これは？」

「ん?ああ、ハロだよ」

「ハロ?」

『ハロ!!ハロ!!』

ハロと呼ばれた球状の物体は私に向かって飛び跳ねる。思わず受け止めてしまう。

『ゲンキカ!!ゲンキカ!!』

私の腕の中でハロはペカペカと目を光らせて、頭の横に付いている羽(?)を動かす。何処と無く可愛い。

「ハロはね、ティエリアさんが作ったロボットで。端末を付ければそこらへんで売ってるPCよりも性能が良いんだよ。それにね、ハロを介してISの整備をすると意外に捗るし」

「なに？コレはISの整備も出来るのか？」

驚いて聞き返す。彼女は何やらコンピュータを操作している。

「うん。自分のISデータをハロにインストールすればOKみたいけど、ISのデータ容量って結構多くてさ、IS一機にハロ二体って感じで少しコストが掛かるんだ」

「それでも小型ロボット二機に収まる様に作れるのか？」

私の疑問にハロはペカペカと目を光らせる。何故だろう、物凄く撫でたい。そう思った瞬間、先程の黒い塊から音が聞こえる。

「よし、起動出来た」

そういつて、彼女は黒い塊の中に入る。

「ほらほら、ラウラさんも入って」

「あ、ああ」

少し躊躇したが、ハロを床に降ろしてから中に入る。中は意外と広く、目の前に何かをはめ込む台がある。

『聞こえる？』

「ああ、問題ない」

横合いから通信が来た。どうやら壁一枚隔てて彼女がいるようだ。

『んじゃ、シミュレーターの簡単な説明するね？先ず、待機状態のISを目の前の台に置いてくれる？そうすれば機械が勝手にISの情報を読み取ってくれるから』

言われたとおりに待機状態の『シュバルツェア・レーゲン』をはめ込む。すると、目の前が急に映像を映し出す。そして映像はPCの画面のように変わる。

『それじゃ、ミッションを選択しようか。先ず場所は渓谷。ほい、ラウラさん。好きな相手選んで、画面をタッチすれば機械が認識するから』

そう言われた瞬間、画面に三つの顔写真が現れる。私は顔写真の人物を見る。一人は赤髪の軽そうな男。一人は壮年の男性で左目に傷が付いている。最後の人物は金髪の青年だ。私は特に考えず、金髪の青年の顔写真にタッチする。

『はいはい。ええっとお相手はユニオンのフラッグファイターズだね』

声と共に周囲全体が変わる。

「ほお、本格的だな」

周囲が様変わりしていた。場所は先程、彼女が設定した渓谷だった。そして何時の間にか私はISを起動した状態で空中に浮かんで

いた視線を横に動かすと『ヴァーチェ』を起動した彼女が同じく浮かんでいた。

『ISの動かし方は同じだから試しに動かしてみて』

「ああ」

短く答え、ISを動かす。本当に動かし方は同じで驚く。そしてハイパーセンサーが前方の機体を捉える。黒い戦闘機のような機体が十二機、編成を組んで飛んでいる。

「あれがオーバーフラッグズとやらか？」

『データ送るね』

そういつて、ハイパーセンサーに『オーバーフラッグ』のデータが送られる。どうやら可変機の様で戦闘機から人型になれるらしい。

「成る程、スペックを見る限り、そこそこの相手らしいな」

『気をつけてね。隊長機はかなり出来るみたいだから』

そういつと、彼女は肩に備え付けられた大型のキャノン砲からビームを放った。それは真っ直ぐ目標に突っ込むが回避される。

「では、お手並み拝見と行くか」

呟き、ISを加速させる。

「つとと、こう相手が速いと補足しにくいな」

呟き、脚部装甲に内蔵されているGNミサイルを発射する。最初の一撃の後、ラウラさんと一緒に戦闘に入り、オーバーフラッグの数を徐々に減らし、残り三機までに減らしたのだ。ラウラさんは隊長機と一騎打ちをして私が残りの二機を相手にしているのだが、はっきり言って厄介だ。この二機驚くほどに息が合っている。今もミサイルを背後に引き付けている一機が同じくミサイルに背後を取られている味方機を助け、助けられた味方機は減速しながら旋回、助けてくれた機体の後ろにあるミサイルを撃ち落す。その作業が流れるように行われ、且つ高速で行われている。そして二機の内、一機が人型に変形して私に突っ込む。変形した機体は青白いサーベルを抜くと一閃。

「うわっ!?!」

驚き、私もGNビームサーベルを抜いて、罅迫り合いに入る。だが、突撃した機体は直ぐに離れる。同時にその後ろからもう一機のオーバーフラッグが放ったミサイルが飛んで来た。

「うわあっ!?!」

後ろに下がりながら、バズーカで迎撃する。そして二機は私を挟むように飛行する。何時の間にか突撃していた機体も戦闘機状態になっていた。

「この、いい加減にして!!!!!!!!!!」

叫び、バズーカで左、肩のGNキャノンで右のオーバーフラッグを狙うが、間一髪で避けられる。そして二機の内一機が直ぐ目の前を通る。

「先ず、一機」

咄くと同時に通り過ぎた一機が真つ二つに切り裂かれ、爆散する。右手には先程抜いていたビームサーベルが握られている。そして残り一機にミサイルを放つ。オーバーフラッグはすぐさまフレアやチャフでミサイルを誤魔化しながら、飛行する。

「そこおっ!!!!!!!!!!」

叫び、バズーカを放つ。砲弾は弧を描きながらミサイルから逃れるオーバーフラッグに着弾。そして着弾したことにより減速した瞬間、ミサイルに追い付かれ、爆散する。

「ふう、慣れない装備で戦うのってキツイな」

息を吐き、視線をラウラさんの方に向ける。どうやらまだ戦っているようだ。

「くっ!?!」

オーバーフラッグの攻撃を受け流し、反撃するが。軽々と避けられる。どうやらこの隊長機、かなりのエースだ。

「だが、負けん!?!」

叫び『瞬間加速』イグニッションで後退する。一瞬私を見失って出来た隙に肩のキャノンを放つ。だが、相手は右手を犠牲にしながらも回避する。

「くっ、しぶとい!?!?!?!」

悪態を吐きながら動く。先程まで私がいた位置に正確な射撃が叩き込まれる。

「くっ、奴は左利きなのか」

新しい発見を頭の隅に追いやり、迫り来る弾丸を回避する。そして同時に砲撃を放つが、避けられる。どうやらこの短い戦闘で私の発射タイミングや癖を見抜いたようだ。

「凄いな。あのパイロット」

思わず、賛辞の言葉を漏らす。そして同時にオーバーフラッグに横合いから砲撃が飛んで来た。

「随分と遅かったな」

『遅刻の理由、聞く?』

「いや、いい。援護を頼む」

『了解』

言葉と共にミサイルがオーバーフラッグに殺到するが、相手はまたも軽々とミサイルを撃墜する。だが、ミサイルに集中している今がチャンス。

「十夏！……！」

『了解！……！』

私の叫びに十夏が言葉と砲撃で応える。ミサイルの中を縫うように放たれた砲撃をオーバーフラッグは辛くも回避。だが、左足がやられバランスが崩れている。そこに砲撃を放つ。バランスが崩されたオーバーフラッグは砲撃から逃れられず、爆散する。

「はい」

「ああ」

シミュレータから出た後、近くの自動販売機でミネラルウォーターを買ってラウラさんに渡す。私たちはミネラルウォーターを飲み

ながら一息つく。

「強かったね」

「ああ」

「お姉ちゃんはあれにノーダメージで勝ったって言ってたね」

「教官なら当然だな」

「でも、お姉ちゃんでも負けた相手がいるみたいだね」

「何っ!？」

私の言葉にラウラさんが反応する。私は足元で転がっているハ口を拾い上げ、端末を取り付け操作する。すると、ハ口の目が光り、壁に映像を映す。

「これが、教官が負けたという?」

「うん、その名も『ダブルオーライザー』今の所、三戦三敗中だつて」

私の言葉に絶句するラウラさん。まあ、私も聞いた時は驚いたな。

「これと戦うことは出来るか?」

「出来るけど、一定以上のミッションクリアが条件だからまだ無理だよ」

「そうか」

そういつて、彼女はミネラルウォーターを飲む。

「十夏、明日から放課後はシミュレータを使うのか？」

「そのつもりだよ」

「分かった。では明日、放課後になり次第、直ぐにシミュレータで訓練だ。新しい装備に慣れるのも速いほうがいいだろう」

「そうだね」

そういつて、私は立ち上がる。彼女も立ち上がり、飲み干した缶をゴミ箱に入れる。

「そうだ、ラウラさん」

「なんだ、十夏」

私は抱えているハ口をラウラさんに渡す。

「このハ口、まだISデータを入れていない奴なんだけど。良かったら使う？」

「良いのか？これはティエリアという人物が作ったものなんだろう？」

私は頷く。

「けど、色々な人に使ってもらったほうが改善点なんかが出てくると思うんだよね。その意味では何人かに使ってもらったほうがいいと思うって」

現に速華さんと光さんにハロは渡しているし（お陰で私の部屋には四体のハロが飛び跳ねている訳だけど）。ラウラさんは少しの間、ハロを見て、オズオズとハロを受け取る。私は笑って。

「それじゃ、明日までにもう一機のハロも用意しておくから。それじゃ、また明日」

「ああ」

私は受け取ったハロと見詰め合っているラウラさんを見た後、自分の部屋に戻る。そういえば、ラウラさん、さっきから私の事名前前で呼んでたな。ちょっとは親しくなれたのかな？

第13話「タッグパートナー」（後書き）

どうも、更新が遅くなったフィロです。今回は十夏とタッグを組むことになったラウラとのシミュレーションです。相手はグラハム率いるオーバーフラッグズ。十夏の相手はハワードとダリルの二人。ラウラはグラハムと戦いました。多分、我等がグラハムさんならIS相手でも互角に戦えるだろうな〜と考えてこんな感じにしました。そしてハロの可愛さに気付いたラウラ。では次回もご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4716t/>

双子の妹は純粋種!?

2011年8月22日21時06分発行